いる。中には埋葬者を示す墓石も何もない。オリジナルの建物はガージャール朝時代の建築だったとされる[474]。

せり出した岩肌にろうそくを貼り付けて灯した跡が多数見られる。

(375) Chehel Dokhtar (写真 950,951,952)

Jādde Chālūs - Rūstāye Kondor

セイエド・エブラーヒームとは村を挟んで反対側の岩肌に作られたコンクリートの箱。そこにろうそくを灯した跡が多数見られる。この目の前に立つトゥートの木にダヒールが結ばれている。

呼び名については、村の女性たちによるとほぼ一致して Chehel Dokhtar であるが、近くに建つ看板によると Chehel Bībī であり、村の男性たちによると、Chehel Dakhtarān や Chehel Akhtar、Chehel Akhtarān など、様々な呼び方がされている。

ここには以前小さな建物があったとのことで、それはガージャール朝時代に遡るとされている[475]。

(376) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 953,954)

Jādde Chālūs - Rūstāye Kondor

2002 年、村の一人が夢にエマームザーデを見た。その夢に従って村の一角を掘ったところ、夢の通りに墓石が現れた。そこでそこに廟を建設し、エマームザーデとしてまつることにしたとのこと。

2003 年当時は、ドームの付いた廟を建設している途中であった。

村の中心からは少し外れた村の中。

(377) Emāmzāde Soleimān (写真 955,956,957)

Jādde Chālūs – Arange – Rūstāye Abharak

Emāmzāde Soleimān az navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far

アランゲの一番奥の村のはずれに建つ廟。アランゲにある Emāmzāde Ḥosein と似た木の扉を持つ。廟の前には小さな墓地。廟のハーダムだったという男性の新しい墓が目立つが、古い墓が多い。

数年前に崩れてしまったという天井や壁は、修理する様子も見られないまま放置されている。

このあたりの住人はほとんどがテヘランなどに引っ越してしまい、夏の間だけしか戻ってこない人が多いとのことであった。

---

[474] Sarvqadī, p.129. *Pazhūhesh-nāme*, p.237.
[475] Sarvqadī, p.132. *Pazhūhesh-nāme*, p.237.

廟の建築年代はサファヴィー朝に遡るとされる[476]。

(378) Emāmzāde Ja'far (写真 958)

Jādde Chālūs – Rūstāye Arange

村を流れる川岸の断崖の上。15 年ほど前に壊れたとのことで、ドームが落ち、壁も崩れたままになっている。

アランゲ村はバーグからの収入で潤い、住人はテヘランに移り住んでしまっており、冬期も村に残る人は少ないとのこと。夏は夏休みを過ごしたり、バーグの管理をするために村に戻ってくる人も多く、人口が増える。近年は、ヴィラで過ごす、元々村の出身ではないテヘランの人も多い。

廟の建築年代はガージャール朝に遡る[477]。

(379) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 959)

Jādde Chālūs – Rūstāye Arange

Emāmzāde Ebrāhīm az navādegāne Emām Ja'far Ṣādeq

村の中心近く、小高くなった場所。

以前はエマームザーデがあったが、現在は取り壊され、マスジェドになっている。鍵がかけられており、管理人が見つからなかったために中は確認できなかったが、村の人によると、エマームザーデの墓石のあった場所には現在何も残っていないとのことであった[478]。

(380) Emāmzāde Moḥammad (写真 960)

Jādde Chālūs – Arange – Rūstāye Sījān

Shāhzāde Moḥammad b. 'Īsā b. 'Alī b. Emām Zein al-'Ābedīn

谷間を流れる川沿いの村の入り口脇。墓地の中。

木製のザリーが置かれたハラムと、礼拝用の部屋があるだけの小さな廟。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代とされる[479]。

(381) Emāmzāde Ḥosein (写真 961,962,963)

Jādde Chālūs – Arange – Rūstāye Jūlāb

Emāmzāde Ḥosein b. Emām Mūsā b. Ja'far

アランゲ川が流れる山間にある村の一番奥の小高くなった場所。

---

[476] Sarvqadī, p.137. *Pazhūhesh-nāme*, p.238. *Pazhūhesh-nāme* ではサファヴィー朝からガージャール朝時代となっている。

[477] Sarvqadī, p.132. *Pazhūhesh-nāme*, p.238.

[478] Sarvqadī, p.128.

[479] Sarvqadī, p.140. *Pazhūhesh-nāme*, p.238.

アランゲで最も人々の信仰を集めているエマームザーデで、テヘランからもズィヤーラトの人々がやって来るとのこと。

非常に古いチェナールの木が二本、廟を覆い隠すようにして立っており、その傍らを、廟の下から流れ出てきた水路が通っている。

ホセイニーエ、ザーエルサラーなどが併設されている。

廟はサファヴィー朝時代に遡るが、近年、増改築が行われている。しかし、木の扉やタイルなどは当時のものがそのまま残されている[480]。

(382) Emāmzāde ‘Aṣgarī (写真 964,965)

Jādde Chālūs – Rūstāye Khor

(北緯 35 度 54 分 94 秒、東経 51 度 09 分 35 秒、標高 2340 メートル)

Emāmzāde ‘Aṣgarī az navādegāne Emām Mūsā b. Ja‘far

村の中。周囲は墓地。

壁など崩れかかっている古い廟。中には木製のザリーが置かれている。

廟の建築年代は、周囲の墓地の墓石などからサファヴィー朝時代のものと考えられている[481]。

(383) Emāmzādegān Ebrāhīm va Moḥammad Taqī (写真 966,967)

Jādde Chālūs – Rūstāye Varzan

Emāmzādegān Ebrāhīm va Moḥammad Taqī az navādegāne Emām Mūsā b. Ja‘far

村はずれの川の畔。廟の後ろは川に向かって落ち込んでいる。

廟の周囲には村の墓地。その外にはバーグが広がっている。廟のすぐ近くに、現在は使われなくなってしまっている古いハンマーム。

建物は近年になって建築されたもの[482]。

(384) Emāmzādegān Hāshem va Hārūn (写真 968,969,970)

Jādde Chālūs – Rūstāye Leilestān

Emāmzādegān Hāshem va Hārūn b. Emām Mūsā b. Ja‘far

斜面に張り付いたように広がる村の麓近く。

村の墓地の中に建つ廟。周囲をバーグなどの緑に囲まれている。

廟の前に立つ巨木の枝にたくさんのダヒールが結ばれている。

廟は古いものを取り壊し、近年新築されたもの[483]。アルミ製のザリーが置かれている。

---

480 Sarvqadī, p.134. *Pazhūhesh-nāme,* p.238.
481 Sarvqadī, p.138. *Pazhūhesh-nāme* ではガージャール朝時代のものとされている。 (p.238)
482 Sarvqadī, p.129. *Pazhūhesh-nāme,* p.237.
483 Sarvqadī, p.141. *Pazhūhesh-nāme,* p.237.

(385) Emāmzāde Reḍā al-Dīn (写真 971,972)

Jādde Chālūs – Rūstāye Kalhā

Emāmzāde Reḍā al-Dīn az navādegāne Emām Zein al-'Ābedīn

川沿いのバーグの中に建つ廟。

ホセイニーエを兼ねており、入り口を入るとホセイニーエの広い空間。その奥にあるカーテンで仕切られた小部屋がエマームザーデ。

廟は近年に古い廟を取り壊し、新築されたもの[484]。

(386) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 973,974)

Jādde Chālūs – Rūstāye Kalvān

村の一番奥。ギーラース(桜桃)などのバーグの中。

小さな一部屋だけの廟。それほど古い建物ではないが、現在は屋根が落ちるなどしており、廟内に人が訪れている様子はあまり見られない。

廟の前に大きな糸杉とトゥートの木が立っており、そこにダヒールが結ばれている[485]。

(388) Emāmzāde Ebrāhīm ma'rūf be Sepahsalār (写真 975,956,977,978,979)

Jādde Chālūs – Tekiye Sepahsalār

Emāmzāde Ebrāhīm b. Borhān al-Dīn b. Moḥammad b. al-Ḥasan al-Aṣghar b. 'Alī b. al-Ḥosein b. 'Alī Abī-Ṭāleb

村の奥の山の上。廟のある山の麓を川が流れている。廟へ上る途中に墓地が設けられている。

山にへばりつくようにして建つ廟は建て増しが行われ、入り口を入ってすぐはホセイニーエとなっている。その奥の岩窟に取り付けられた小部屋があり、木製のザリーの上に金属製のザリーをかぶせたものが置かれている。このザリーの奥の岩からは湧き水が湧いている。ハラムには女性の姿ばかりが目立つ。男性たちはハラムでのズィヤーラトを手早く済ませ、ホセイニーエや廟の外で女性たちのズィヤーラトが終わるのを待っている。ハーダムなどに女性たちが多い理由を尋ねたが、明確な答えは返ってこなかったが、ハラムが狭いから、男性が女性に遠慮をしているのだろうとのことであった。

廟の裏側にある岩の上から水がしたたっている。その岩のえぐれた部分が祈りを捧げるための場所となっており、願い事のある人がろうそくをともしながらここで願い事をする。

---

[484] Sarvqadī, p.136. *Pazhūhesh-nāme*, p.237.

[485] Sarvqadī はこの木と廟の年代が近いであろうとしている。(p.129) *Pazhūhesh-nāme*, p.237.

ザーエルサラーなどズィヤーラトに訪れる人のための設備が整えられており、夏になると人でいっぱいになる。

廟の建築はガージャール朝時代に遡るとされる[486]。

(389) Emāmzāde Ḥasan (写真 980,981)

Jādde Chālūs – Rūstāye Ḥasanakdar

Emāmzāde Ḥasan b. Emām Mūsā b. Ja'far

村の一番奥、一番高くなっている場所。背後はすぐに山。

周囲は墓地。殉教者墓地の一部は廟の中に作られている。

木製のサンドゥーグが置かれたハラムの前に広いホセイニーエを兼ねた礼拝用の空間。女性用の礼拝室はハラムの入り口を入って右手の部屋。ここに泊まり込み用の布団などが用意されている。

近年、増改築が行われているが、オリジナルはサファヴィー朝時代のものと見なされている[487]。

(390) Qadamgāhe Āqā Seyyed 'Alā al-Dīn[488] (写真 982,983,984)

Jādde Chālūs – Rūstāye Velāyat-Rūd

(北緯 36 度 04 分 82 秒、東経 51 度 22 分 91 秒、標高 2483 メートル)

村のほぼ中心部にあるマスジェデ・ジャーメの隣。現在はホセイニーエをかねた廟となっている。

Āqā Seyyed 'Alā al-Dīn の足跡が記された場所とされるが、廟内には足跡を示すものは見あたらない。どのような人物であったのかは伝わっていない。

廟の一角にある木のザリーにダヒールがむすばれ、廟内に下がるシャンデリアにタスビーフがたくさんかけられている。壁の一面がシャムダーンのようになっており、ろうそくをともした跡が多数見られる。

オリジナルの建築はガージャール朝時代のものとされる[489]。

(391) Emāmzāde Bībī Zarīn (写真 985,986,987,988)

Jādde Chālūs – Rūstāye Khor

Emāmzāde Bībī Zarīn b. Emām Mūsā b. Ja'far

キャンのサンガーンからも登山路があり、ちょうど中間点くらいとのこと。近隣の村の人々の他にもトレッキングの人々が多く訪れる。

---

[486] Sarvqadī, p.128. *Pazhūhesh-nāme* においては、さらにイスラーム初期まで遡ることができるとされている。(p.237)

[487] Sarvqadī, p.133. *Pazhūhesh-nāme*, p.236.

[488] Sarvqadī, p.137.

[489] *Pazhūhesh-nāme*, p.236.

山間の広々とした草原に建つ廟。廟の下からは泉が湧いている。

ハラムの奥に墓石が置かれているが、入り口を入ってすぐの場所に頭を出している岩も敬意が払われている。

20 年ほど前、ある女性が娘の病気に心を痛めながら眠りについたところ、夢の中のエマームザーデが現れ、自分のために廟を作るようにと言った。女性は山の中で夢に見た場所を探し、そこに粗末ではあるが廟を作った。すると娘の病気は治った。それ以後、近隣の人々が通うようになり、廟も初めのものに比べると大きくなったとのこと。

(q) サーヴァジボラーグ区 (Sāvaj-Bolāgh)

テヘラン州の西端に位置する郡部。東と南をキャラジ郡と、西をガズヴィーン州のアーブ・イェク郡と、北をマーザンダラーン州と接する。

テヘラン-ガズヴィーン街道沿いに位置するナザル・アーバード(Naẓar Ābād)とハシュトゲルド(Hasht-gerd)から成るサーヴァジボラーグ(Sāvaj-Bolāgh)と、アルボルズ山脈の中に位置するターレガーン(Ṭāleqān)の二つの地域から成る。

アルボルズ山脈の南麓に位置するハシュトゲルドは夏も比較的涼しい気候と、アルボルズ山脈からの豊かな水資源により果樹栽培をはじめとする農業と牧畜が盛んである。ハシュトゲルド南部とナザルアーバードは標高が他の地域に比べると比較的低く、平均して標高 1000 メートル以下である。そのため、他の地域に比べると平均気温が高く、降水量も比較的少ない。

地域全体が標高 1500 メートルを超えるターレガーンは、夏でも涼しい高山性の気候を持ち、冬は雪によって孤立する村も見られる。そのため、近年では、冬になるとガズヴィーンなどの都市部に住み、春から夏にかけてのみ村で過ごすという人も多い。村によっては、管理人として数人を残して住人がほとんど全くいなくなる村も見られる。産業は果樹と乾果類の栽培と牧畜が中心となっている。

サーヴァジボラーグは街道沿いに位置し、人と物の中継地としてその存在感を示してきた。ターレガーンはアルボルズを超えたマーザンダラーンとのつながりが強く、文化的にも経済的にもテヘランやガズヴィーンよりもマーザンダラーンの一部であった。

サーヴァジボラーグの聖所

(392) Emāmzāde Ja'far (写真 989)

Hashtgerd – Khiyābāne Rāhe Āhan

(北緯 35 度 56 分 99 秒、東経 50 度 39 分 95 秒、標高 1252 メートル)

Emāmzāde Ja'far b. Emām Mūsā b. Ja'far

町外れに広がる墓地の中。

普段は扉が閉められていて、木曜日の午後のみ扉を開けるとのこと。

サファヴィー朝時代に建築され、その後何度か手が加えられて現在の形になったと考えられている[490]。内部には200年ほど前の落書きも残されている。

(393) Emāmzāde Ḥasan ma'rūf be Abū al-Ḥasan (写真 990,991,992)

Rūstāye Meskīn ābād

(北緯35度59分56秒、東経50度33分44秒、標高1219メートル)

村から距離のある畑の中。低い土塀が巡らしてあったが破損がひどく、近年、文化財保護庁により修理が行われた。廟も2001年から修復が行われている[491]。

タイルなどによる装飾が行われていたが剥落してしまい、現在ではほとんど残っていない。

ザリーは置かれているが、その中に墓石などは見られない。修理が行われている最中でも、週末になるとズィヤーラトに訪れ、ランプやろうそくを灯す人が絶えることはなかったとのことであった。

廟の建築はサファヴィー朝時代に遡ると見なされているが、その後ガージャール朝時代に増改築が行われ、廟の周囲の土塀や門はこの時代のものと見なされている[492]。

土塀の外には低いタッペが見える。

(394) Emāmzāde Ja'far (写真 993,994,995)

Rūstāye Qārpūz ābād (Qal'e Sheikh)

(北緯35度58分65秒、東経50度28分16秒、標高1180メートル)

Emāmzāde Ja'far az navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far

村はずれの墓地の中。

二つのドームが連なった廟。金属製のサンドゥーグの置かれた部屋の前に設けられた部屋にアラムが置かれており、ここにダヒールが結ばれている。

部屋の中心から外れた場所にザリーが置かれている。

廟の建築はサファヴィー朝時代に遡ると考えられているが、後世の増改築、修理が行われている[493]。

---

[490] Ḥātamī, Abū al-Qāsem, *Āthāre Tārīkhīye Sāvaj-Bolāgh va Naẕar Ābād*, Tehrān, 1383S.H./2003-4, pp.174-175. *Pazhūhesh-nāme*, p. 226. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.111-112.

[491] 2007年には廟の修理はほぼ完了していたが、土塀の一角に設けられていた門の部分の修理などが続いていた。

[492] Ḥātamī, pp.272-276. *Pazhūhesh-nāme*, p. 226. *Banā-hāye Āramgāhī*, p.94.

[493] Ḥātamī, pp.290-292. *Pazhūhesh-nāme*, p. 226. Ḥātamī は、廟の前にある墓の表面に掘られた1133/1720-1年が廟の建築年であると見なしている。

(395) Emāmzāde Hāshem (写真 996,997)

Hīv – Rūstāye ‘Arab ābād

(北緯 36 度 00 分 42 秒、東経 50 度 40 分 38 秒、標高 1450 メートル)

Emāmzāde Hāshem az navādegāne Emām Mūsā b. Ja‘far

村の中のメイダーンの脇。村の墓地は別な場所にある。

廟の周囲や内部には盗掘の跡が見られる。

古い木のザリーが置かれた部屋は、ドームの一部が落ちたり壁の一部が崩れたりしている。

建築年代はサファヴィー朝時代と推測されている[494]。

(396) Emāmzāde Mūsā[495] (写真 998,999)

Hīv – Rūstāye Sīlāb

Emāmzāde Mūsā b. Emām Zein al-‘Ābedīn

Hīv から川沿いの道を山の奥へと入っていった突き当たり。廟の裏手を川が流れている。

以前の建物は壊れ、現在ではほぼ新しいものとなっている。近隣の人々の信仰を集めているとのことで、管理人が常駐し、男女別になったホセイニーエも増築されている。特に夏になると人々が集まってくる。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代と推測されている[496]。

(397) Emāmzāde Seyyed Soleimān[497] (写真 1000,1001)

Rūstāye Khor

Emāmzāde Seyyed Soleimān az navādegāne Emām Zein al-‘Ābedīn

村はずれの丘の上。後ろは崖。周囲にはイスラーム期に入ってからの各時代のものと見られる陶器片などが採集されている、非常に古い墓地が広がっている。

村の人々の信仰を集めており、廟に集まってくる人々のために、廟内の部屋でコーランの教室を開いたりドアーの集いを開いたりしている。

一時期、廟が大分崩れたりして荒れていたが、ヘイアトル・オマナーが努力をして、30 年ほどかけて自力で修理を行ったとのことであった。

---

[494] Ḥātamī, pp. 149-151. *Pazhūhesh-nāme*, p. 225.

[495] この廟は、エマームザーデではなく、専制的な支配者との戦争の中で死んだ人々の墓であったとされる。その人々への尊敬の念を忘れなかった人々がこの埋葬地をズィヤーラトガーとしたと説明されている。(Ḥātamī, p.163)

[496] Ḥātamī, p.163. *Pazhūhesh-nāme*, p. 226.

[497] このエマームザーデも、エマームザーデ・ムーサーのように専制的な支配者に対して立ち上がった人々の墓であったと推測されている。(Ḥātamī, p.141)

廟の建築年代はサファヴィー朝時代と推測される[498]。

(398) Emāmzāde Zobeide Khātūn　(写真 1002)

Shomāle Khor – Rūstāye Bormā Cheshme

村から山の中に入った場所にあるバーグや畑の中の丘の上。丘の下には泉が湧いている。

廟内外の激しい盗掘により、崩壊寸前になっている。丘全体に盗掘の穴が見られる。

人がズィヤーラトに訪れている形跡は全くなく、近くの村の人々の中にも廟の存在を知らない人も見られる。、

廟の建築年代はイールハーン朝からサファヴィー朝時代と推測される[499]。

(399)　Khātūne Qiyāmat　(写真 1003,1004)

Rūstāye Fashand

村の中の貫く道路脇、道路よりも少し高くなったところにあるそれほど古くない民家風の建物。[500]

岩に張り付くようにして建ち、廟の中に岩の一部が露出している。

大きな木のザリーでほぼいっぱいになる小さな部屋。

男子禁制の廟であり、出産間際の女性が無事の出産を祈って訪れたり、子供が生まれた後に訪れるという。

(400)　Emāmzādegān Ṭāher, Moṭahhar va Maẓhar[501]　(写真 1005)

Rūstāye Fashand

Khātūne Qiyāmat から 100 メートルほどのところにある廟。周囲は墓地。

礼拝用の部屋に囲まれたそれほど大きくないハラムを持つ。それ以前の廟を取り壊し、新しく建てられたもの。

道路を挟んだ向かいに村のハンマーム。

現在は新しいザリーが置かれているが、古い木のザリーの碑文から、取り壊された廟の建築年代が 1165/1751-2 年以前であると見なされている[502]。

(401)　Emāmzādegān Ḥādī va ‘Alī-Taqī　(写真 1006,1007)

Rūstāye Yonge Emām

---

[498] Ḥātamī, pp.141-143. *Pazhūhesh-nāme*, p. 225.
[499] Ḥātamī, pp.147-149. *Pazhūhesh-nāme*, p. 225.
[500] Ḥātamī, pp.137-138. *Pazhūhesh-nāme* では、ガージャール朝時代に遡ると指摘されている。(p.225)
[501] Ḥātamī によると Se tan であるが、ワクフ慈善庁の資料ではこのようになっている。
[502] Ḥātamī, pp.134-136. *Pazhūhesh-nāme* では、サファヴィー朝時代と推測とされている(p. 225)

Emāmzādegān Ḥādī va ‘Alī-Taqī az navādegāne Emām Mūsā b. Ja‘far

周囲を墓地に囲まれた廟。道路を挟んだ向かいにサファヴィー朝からガージャール朝時代の大きな隊商宿。

村はずれではあるが、人々の信仰を集めており、平日でも多くの人が訪れている。ハシュトゲルドなどからもズィヤーラトの人がやってくるとのこと。

サファヴィー朝時代の建築。ガージャール朝時代に修理が行われている[503]。

(402) Emāmzāde Shāhzāde Ḥosein (写真 1008)

Rūstāye Kordān

Emāmzāde Shāhzāde Ḥosein az navādegāne Emām Zein al-‘Ābedīn[504]

村はずれの墓地の中に建つ塔のような廟。その周囲はバーグ。

2003 年に訪れた際には改修が行われていた。そのため、内部を確認することはできなかった。

セルジューク朝期の建築であると考えられている[505]。

(403) Emāmzāde Bībī Sakīne[506] (写真 1009)

Rūstāye Kordān

Emāmzāde Bībī Sakīne az navādegāne Emām Zein al-‘Ābedīn

Emāmzāde Shāhzāde Ḥosein の傍らに立つ小さな廟。ホセインとは兄妹であるとされている。

2003 年時点では修復中であり、廟内には墓石がむき出しの状態で置かれていた。

廟の外壁にはろうそくを灯した跡が多く見られる。

オリジナルはサファヴィー朝時代の建築とされる[507]。

(404) Emāmzāde ‘Abdollāh va Ṣāleḥ (写真 1010,1011)

Rūstāye Chendār

(北緯 35 度 57 分 26 秒、東経 50 度 47 分 09 秒、標高 1488 メートル)

Emāmzāde ‘Abdollāh az navādegāne Emām Zein al-‘Ābedīn

村はずれの小高い丘の上。周囲は墓地。

二つ並んだサンドゥーグのうち、正面入り口から入って手前が Emāmzāde

---

503 Ḥātamī, pp.183-186. *Pazhūhesh-nāme*, p.226.

504 村の一部の人は、第四代目エマームの二番目の息子であり、Ḥosein Aṣghar という名であると考えているという。(Ḥātamī, p.58)

505 Ḥātamī, pp.58-60. *Pazhūhesh-nāme*, p.223.

506 ワクフ慈善庁のリストによると Bībī Sakīne であるが(cf. Sarvqadī, p.68)、文化財保護庁によると、Bībī Nesā’となっている。(Ḥātamī,p.59. *Pazhūhesh-nāme*, p.223)

507 Ḥātamī,p.59. *Pazhūhesh-nāme*, p.223. *Dāyerat al-Ma‘ārefe Zane Īrānī*, jeld avval, p.113.

‘Abdollāh、奥が Emāmzāde ‘Abdollāh につき従い共に死んだとされる従者 Ṣāleḥ のもの。

何度か盗掘の被害に遭っているとのことであるが、廟そのものが最近の建築であり、周囲も近年整備が行われているためにその痕跡は明らかではない。

廟の奥の小部屋に、エマームザーデの奇跡により病が治り、それに対する感謝として現在残る廟を建築したとされるハージ・ヘイダルハーンの墓がある。最初の廟の建築年代はザンド朝時代に遡るとされる[508]。

(405) Emāmzāde Borhān al-Dīn (写真 1012)

Rūstāye Qūhe

(北緯 35 度 50 分 37 秒、東経 50 度 48 分 26 秒、標高 1296 メートル)

Emāmzāde Borhān al-Dīn b. Emām Mūsā b. Ja‘far

村はずれの墓地の中。

廟内にはエマームザーデの妹のものと言われる墓も置かれ、崇敬の対象となっている。

近隣の人々の信仰を集めており、曜日を問わず人がズィヤーラトに訪れるとのこと。

現在の建物は最近のものであるが、オリジナルはガージャール朝時代に遡ると考えられている[509]。

(406) Emāmzāde Yūsef (写真 1013,1014)

Rūstāye Veshgīn

Emāmzāde Yūsef b. Emām Mūsā b. Ja‘far

村へ入る道沿いの丘の上。周囲には墓地。

古い木のザリーが置かれているが、一部破損している。中の墓石は最近置かれた新しいもの。それによると、エマームザーデは 148/765-6 年没。

ザリーだけではなく、廟内のあちこちにダヒールが結ばれている。

建物は近年、改修が行われている。オリジナルはガージャール朝時代末期のものと見なされている[510]。

(407) Emāmzāde Seyyed Mūsā (写真 1015,1016)

Rūstāye Khorvīn

(北緯 35 度 59 分 10 秒、東経 50 度 49 分 13 秒、標高 1604 メートル)

---

508 Ḥātamī,pp.64-65. *Pazhūhesh-nāme*, p.223.

509 Ḥātamī,pp.105-107. *Pazhūhesh-nāme*, p.224.

510 Ḥātamī,pp. 85-86. *Pazhūhesh-nāme*, p.224. Ḥātamī はアージーン・ドジーンのエマームザーデ・ハフト・タンとの建築プランの類似を指摘している。

Emāmzāde Seyyed Mūsā b. Emām Moḥammad Taqī

村はずれの水路の傍ら。チェナールの巨木の下。

改修中ではあるが、人々が多く訪れ、ろうそくを灯すなどして祈りを捧げている。

何度も盗掘が行われ、その影響で廟が壊されているとのこと。

廟のオリジナルはサファヴィー朝時代に遡ると考えられている[511]。

(407) Emāmzāde Yaḥyā (写真 1017,1018)

Rūstāye Dūz-'anbar

(北緯 36 度 00 分 44 秒、東経 50 度 50 分 00 秒、標高 1841 メートル)

Emāmzāde Yaḥyā b. Emām Mūsā b. Ja'far

村の奥、村を見下ろすことができる場所。廟の前には墓地。

現在は廟を囲い込むようにしてホセイニーエが作られている。

廟のドームには建築当時の天使などの彩色画が残されているが、現在は天使の顔などはつぶされている。

古い木のザリーが置かれた廟内は、ザリーの周囲を巡るのが精一杯の広さ。

村の外からもズィヤーラトの人が多く訪れるが、夏には遠方からも人が多く訪れるとのこと。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代のものと考えられているが、その後、ガージャール朝時代から現在まで何回か改修が行われている[512]。

(409) Emāmzāde Bībī Sakīne (写真 1019,1020)

Rūstāye Dūz-'anbar

Emāmzāde Bībī Sakīne b. Emām Mūsā b. Ja'far

Emāmzāde Yaḥyā の姉妹。Emāmzāde Yaḥyā の廟とはホセイニーエを挟んだ反対側にある小さな廟。小さな木製のザリーが置かれている[513]。

以前の建物は完全に取り壊されており、現在はホセイニーエの一室のようになっている[514]。

---

[511] Ḥātamī,pp.66-68. *Pazhūhesh-nāme*, p.223. 廟内に置かれていたザリーに関しては、次の論文が詳しい。Samsār, Moḥammad Ḥasan, Ṣandūqe Monabbate Emāmzāde Mūsā (Khorvīne Karaj), *Mīrāthe Jāvīdān*, 28, 1378S.H./1999-2000, pp.65-70.

[512] Ḥātamī,pp. 77-80. *Pazhūhesh-nāme*, p.223. Ḥātamī はティームール朝時代の建築との類似性を指摘している。Qarākhānī Bahār, Ḥasan, Gozāresh az Ziyāratgāh Emāmzāde Yaḥyā : Rūstāye <Dūz 'Anbar> Hashtgerd, *Mīrāthe Jāvīdān*, 11-12, 1374S.H./1995-6, pp.114-120. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.223-224.

[513] Qarākhānī Bahār による改修前の記録によると、この廟には二つの木製のザリーが置かれており、Shahr bānū と Sakīne のものであるとなっているが、ワクフ慈善庁や文化財保護庁などの資料では Shahr bānū の名は見られない。

[514] Ḥātamī,pp.77-80. *Pazhūhesh-nāme*, p.223. *Dāyerat al-Ma'ārefe Zane Īrānī*, jeld avval, p.130.

(410) Emāmzāde Bībī Qezelor (Emāmzādegān Aḥmad va Moḥammad va Fāṭeme) (写真 1021,1022)

Rūstāye Aghsht

(北緯 35 度 39 分 13 秒、東経 50 度 51 分 23 秒、標高 1607 メートル)

Emāmzādegān Aḥmad va Moḥammad va Fāṭeme farzandāne Emām Mūsā b. Ja'far

村へ入る手前から山へ向かったところ。周囲は墓地。

廟の裏手に泉が湧いており、周囲のバーグへと引かれている。

ズィヤーラトナーメには三人の名前が書かれているが、Emāmzāde Bībī Qezelor あるいは Emāmzāde Fāṭeme Khātūn として知られている。村の人たちに尋ねたが、三人の中でなぜ彼女の名前だけが強調されているのかは不明。

斜面に張り付くようにして建つ廟。廟の周囲にはトゥートやチェナールの巨木が多く見られる。

改修が行われている最中。廟の建築年代はザンド朝と見なされている[515]。

(411) Emāmzāde Shāhzāde 'Alī Akbar (写真 1023)

Rūstāye Tekiye

(北緯 35 度 58 分 44 秒、東経 50 度 51 分 73 秒、標高 1578 メートル)

Shāhzāde 'Alī Akbar az navādegāne Emām Ja'far Ṣādeq

村の入り口脇にある丘の裏側。樹齢 800 年とされる大きなチェナールの陰。

廟を取り囲む塀の中と外に墓地が広がる。

ハラムには古い木のザリーが置かれ、ダヒールが数多く結ばれている。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代に遡ると考えられているが、その後、増改築が繰り返されている[516]。

(412) Emāmzāde Haft tan (写真 1024,1025)

Rūstāye Ājīn Do-jīn

(北緯 36 度 00 分 17 秒、東経 50 度 50 分 15 秒、標高 1815 メートル)

Emāmzādegān Taqī, Naqī va 'Asgarī se farzandāne Ḥasan b. Emām Zein al-'Ābedīn

村の中心から少し外れた道路脇。道路から少し下がったところに廟。その下段に墓地。更にその下には川が流れている。

ハフト・タンではあるが、三人の名前しか明らかではない。

現在の廟は新しい建物で、それ以前の建物がいつ頃建てられたかなどは明

---

[515] Ḥātamī,pp.41-43. *Pazhūhesh-nāme* によると、サファヴィー朝時代に遡る。(p.222) *Dāyerat al-Ma'ārefe Zane Īrānī*, jeld avval, p.115.

[516] Ḥātamī,pp.39-40. *Pazhūhesh-nāme*, p.222.

らかではない[517]。

(413) Emāmzāde ‘Abdol-Qahhār (‘Abdolāh-Qahhār) (写真 1026,1027)

Rūstāye Vardeh

(北緯 35 度 58 分 56 秒、東経 50 度 54 分 30 秒、標高 1624 メートル)

Emāmzāde ‘Abdol-Qahhār az navādegāne Emām Mūsā b. Ja‘far

街道の突き当たりにある村から川沿いに更に奥に入ったところ。

水と緑を求めて、春から夏にかけては遠方からも人が集まってくるピクニック場のようになっている。

廟の周囲には墓地が広がる。また、チェナールの大木が廟を取り囲んでいる。その中でも廟の脇に立つものは樹齢 600 年とされ、近隣の人々に崇敬の対象になっているという[518]。

非常に美しい木組みの扉や木製のザリー、ミンバルが置かれている。ザリーは取り替えられた古いものが廟の一角に置かれている。その中にもお金を投げ込む人が見られる。

廟内に置かれたアラムにたくさんのダヒールが結ばれている。

廟内の落書きの中には 992/1584 年などの年号が見られる。これらから、廟のオリジナルはサファヴィー朝時代に建設され、その後、何度かの改修などが行われたと考えられている[519]。

(414) Emāmzāde Bībī Sakīne[520] (写真 1028)

Rūstāye Vardeh

(北緯 35 度 58 分 38 秒、東経 50 度 53 分 49 秒、標高 1606 メートル)

Emāmzāde Bībī Sakīne b. Emām Mūsā b. Ja‘far

Emāmzāde ‘Abdol-Qahhār の姉妹。

村に入る手前の川沿いに広がる個人のバーグの中。

かなりの急斜面を持つ丘の上。バーグや村が見渡せる場所。

ドームや壁が崩れ落ち、改修が行われており、廟内にザリーや墓石は見られない。

廟の建築年代はティームール時代に遡ると見られている[521]。

---

[517] Ḥātamī,pp. 75-76. *Pazhūhesh-nāme*, p.223. Ḥātamī は、エマームザーデ・ヤフヤーを模して建築した可能性を指摘している。また、以前、廟が荒廃していたときに、村人の一人の夢に光り輝く人が現れ、廟を修復するように命じたという話が引用されている。

[518] このチェナールの期の傍らには水車があったとされる。(Ḥātamī,p.32-33)

[519] Ḥātamī, pp.32-34. *Pazhūhesh-nāme*, p.222. *Banā-hāye Āramgāhī*, pp.181-182.

[520] ワクフ慈善庁のリストでは Bībī Sakīne であるが、文化財保護庁のリストでは Bībī Khātūn（Bībī Sakīne）となっている。cf. *Dāyerat al-Maʿārefe Zane Īrānī*, jelde avval, pp.107-108.

[521] Ḥātamī, pp. 37-38. *Pazhūhesh-nāme*, p.222. Ḥātamī は、この廟が khānqāh あるいはテキエとして用いられて

(415)　Emāmzāde Mūsā　(写真 1029,1030)

Rūstāye Sorhe

Emāmzāde Bībī Nesā b. Emām Zein al-'Ābedīn

この廟よりもバーグの中を入ったところにある Emāmzāde Mūsā の姉妹。

村の奥のバーグの中。墓地は持たない。

現在はマスジェドの一角となっている。ザリーの置かれた部屋の前には石灰の袋をはじめとする様々な荷物が積まれ、物置のようになっている[522]。

村の女性が特に多くズィヤーラトに訪れるとのこと。

(416)　Emāmzāde Esḥāq　(写真 1031)

Rūstāye Sorhe

村の入り口近くの道路脇。

以前は一部屋だけの小さな廟があったが、現在は崩れてしまい、再建の動きは特にないとのこと。

(417)　Emāmzādegān Mūsā va Bībī [523]　(写真 1032,1033)

Rūstāye Sorhe

(北緯 36 度 01 分 52 秒、東経 50 度 58 分 46 秒、標高 2251 メートル)

Emāmzāde Mūsā b. Emām Zein al-'Ābedīn

村の外のバーグの中。Emāmzāde Bībī Nesā 廟の前の分かれ道を左手に折れた先。廟の前には墓地が広がっている。

入り口を入ってすぐホセイニーエ。その奥にザリーの置かれたハラム。

シャファーを多く持つために奇跡譚も多く、近隣の人々が多く集まってくるとのこと。

(418)　Emāmzāde Bībī Sakīne Khātūn　(写真 1034,1035)

Rūstāye Sonqor ābād

(北緯 35 度 51 分 50 秒、東経 50 度 46 分 53 秒、標高 1291 メートル)

村はずれの墓地の中。非常に古い墓やソンニー派風の墓も見られる。

いた可能性について指摘している。

[522] 2008 年に訪れたときにはマスジェドではなく、エマームザーデのみの建物となっていた。内装、外装共にきれいに整備され、ザリーの置かれたハラムと礼拝のためなどに使われる部屋とになっていた。

[523] Ḥātamī はこのエマームザーデを「Kāẓem」としている。(p.47-48. *Pazhūhesh-nāme*, p.222) しかし、ワクフ慈善庁のリストなどでは「Mūsā va Bībī」である。(Sarvqadī, p.73)　現地の表記では、Mūsā のみであり、Bībī の存在については触れられていない。村の人に聞いても、廟内に埋葬されているのは Emāmzādegān Mūsā のみであるとのことである。恐らく、この廟のすぐ近くにある Emāmzādegān Mūsā の姉妹の廟、Emāmzādegān Mūsā と混同しているものと思われる。

廟の周囲や内部は激しく盗掘が行われ、荒廃している。

現在は訪れる人も少なくなっているとのこと。実際に、廟内に人が訪れている形跡はほとんど見られない。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代に遡ると見られている[524]。

(419) Emāmzāde Kamāl al-Dīn (写真 1036,1037)

Rūstāye Rāmjīn

Emāmzāde Kamāl al-Dīn naveye Emām Reḍā

村はずれの墓地の中。その周囲には畑やバーグが広がる。

周囲よりもほんの少しだけ高くなった場所に建つ廟。

1380H.S./2001-2 年にそれ以前の建物を壊して新築されたとのこと。

取り壊される前の廟はサファヴィー朝時代のものとされている[525]。

(420) Emāmzāde Sho'eib (写真 1038,1039)

Rūstāye Rāmjīn

Emāmzāde Sho'eib b. Emām Mūsā b. Ja'far

村へ入る道沿いの小さな廟。現在は半壊状態。

ザリーの置かれた部屋も、ドームの一部が壊れて土が入り込んでいる。しかし、人は訪れているようで、新しいろうそくの跡などが多数見られる。

Emāmzāde Kamāl al-Dīn は村に向かう街道から廟の前の枝道を約 250 メートルほど離れたところ。二人の間に血縁関係はない。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代に遡ると見られている[526]。

(421) Emāmzāde Javād (写真 1040)

Rūstāye Qāsem ābāde Āqā

(北緯 35 度 52 分 20 秒、東経 50 度 34 分 03 秒、標高 1268 メートル)

Emāmzāde Javād naveye Emām Reḍā

村はずれの墓地の中。樹齢 800 年ほどといわれる何本もの大きなチェナールとビードに囲まれた廟。

木曜日の午後のみ廟の扉を開ける[527]。その時には墓地と廟は人でいっぱいになるとのこと。

古い木の格子の扉とザリーを持つ古い廟。改修が繰り返されているが、オ

---

[524] Ḥātamī, pp.111-114. *Pazhūhesh-nāme*, p.224. *Dāyerat al-Ma'ārefe Zane Īrānī*, jelde avval, pp.112-113.

[525] Ḥātamī, pp.115-119. *Pazhūhesh-nāme*, p.224.

[526] Ḥātamī, p.115. *Pazhūhesh-nāme*, p.224.

[527] 村の人によると、現在は盗掘の跡は明らかではないが、これまでに廟内が何度か盗掘の被害に遭い、荒らされたためそのようにしているとのことであった。

リジナルの廟の建築年代はサファヴィー朝時代に遡ると考えられている[528]。

(422) Emāmzāde Esma'īl (写真 1041,1042)

Rūstāye Zakī ābād

(北緯 35 度 49 分 46 秒、東経 50 度 39 分 55 秒、標高 1248 メートル)

村からは4キロメートルほど離れた畑の中。低いタッペの傍ら。周囲には古い墓地が広がっている。

古い木のザリーが置かれた廟は傷みが目立つが、掃除は行き届き、新しいろうそくの跡やダヒールが見られることからズィヤーラトの人は多く訪れていることが分かる。

廟の建築年代はサファヴィー朝時代と考えられている[529]。

(423) Emāmzāde Moḥammad (写真 1043,1044)

Rūstāye Dangīzak

(北緯 35 度 55 分 37 秒、東経 50 度 38 分 05 秒、標高 1232 メートル)

村はずれの墓地の中。

小さな廟ではあるが、台所やガッサールハーネまで備えている。現在は、木曜日のみ扉を開けるとのこと。

古い建物を取り壊し、新しく建てられたもの[530]。

(424) Emāmzāde Ẓāher al-Dīn (Ẓahīr al-Dīn) (写真 1045)

Rūstāye Īqor-belāgh

(北緯 35 度 54 分 22 秒、東経 50 度 41 分 29 秒、標高 1273 メートル)

村はずれの墓地の中。周囲をバーグに囲まれている。

古い廟を取り壊し、新しい廟を建築中。

木曜の午後のみ扉を開けるとのことで中は確認できなかった。

取り壊される前の廟はガージャール朝時代のものであったが、さらにサファヴィー朝時代に遡ると見られている[531]。

(425) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 1046)

Rūstāye Tankamān

(北緯 35 度 53 分 21 秒、東経 50 度 37 分 51 秒、標高 1242 メートル)

---

528 Ḥātamī, pp.208-212. *Pazhūhesh-nāme*, p.227.
529 Ḥātamī, pp.129-130. *Pazhūhesh-nāme*, p.225.
530 Ḥātamī, pp.217-218. *Pazhūhesh-nāme*, p.227.
531 Ḥātamī, pp.193-195. *Pazhūhesh-nāme*, p.226. 改修工事に関しては、文化財保護庁が周辺住民の要請に応えて財政的・人的支援計画を実行したとされている。

村はずれの墓地の中。

木曜の午後のみ扉を開けるとのことで中は確認できず。

激しい盗掘により廟の破損が進み、近年、大規模に増改築が行われた。その際に、男女別のホセイニーエが廟を挟んで作られた。

オリジナルの廟はサファヴィー朝時代の建築と見なされている[532]。

(426) Chehel Dokhtar (写真 1047,1048)

Rūstāye Najm ābād

(北緯 35 度 51 分 09 秒、東経 50 度 32 分 36 秒、標高 1199 メートル)

村からは 3 キロメートルほど離れた畑の中。小さなタッペの傍ら[533]。

激しい盗掘により廟の荒廃が進んでおり、近隣の人々も廟に対する信仰を失っており、訪れる人もほとんどいないとのこと。

廟の建築年代はティームール朝からサファヴィー朝時代にかけてと考えられている[534]。

ターレガーン(Ṭāleqān)の聖所

(427) Qadamgāhe Solṭān Sabz Pūsh (写真 1049,1050)

Ṭāleqān – Rūstāye Galīnak

(北緯 36 度 10 分 23 秒、東経 50 度 45 分 10 秒、標高 1872 メートル)

村はずれの墓地の中。

村の人によると、以前はドームを乗せた建物があったが、洪水により全て流されてしまった。そのため、現在は墓石を鉄の柵で囲っているだけになってしまった。しかし、この墓石も、本当にガダムガーかどうかは分からないとのことであった[535]。

洪水によって流されてしまった廟は、8-9/14-15 世紀のものであったと推測されている[536]。

(428) Emāmzāde Yūsef (写真 1051,1052)

Ṭāleqān – Rūstāye Bādāmestāne Veshte

(北緯 36 度 09 分 49 秒、東経 50 度 50 分 09 秒、標高 2140 メートル)

Emāmzāde Yūsef b. Emām Mūsā b. Ja'far

---

[532] Ḥātamī, pp.235-237. *Pazhūhesh-nāme*, p.227. *Dāyerat al-Maʿārefe Zane Īrānī*, jelde avval, pp.120-122.

[533] 現在は干上がっているが、以前にはこの廟の傍らをガナートが通っていた。(*Dāyerat al-Maʿārefe Zane Īrānī*, jelde avval, p.120)

[534] Ḥātamī, pp.256-259. *Pazhūhesh-nāme*, p.228.

[535] cf. Pāzoukī Ṭoroudī,Nāṣer, *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, Tehrān, 1382S.H./2003-4, p.218.

[536] *Pazhūhesh-nāme*, p.156.

大きなチェナールの陰にある廟。廟から下がった斜面に墓地。

ヴェシュテ村とは川を挟んだ向かいの丘の中腹。

新しい金属製のザリーが置かれたハラムはそれほど広くないが、ホセイニーエなどが隣接して建てられており、木曜日などには村の人が集まってくる。

ワクフ慈善庁の支援により村の人々が改修中。

廟のオリジナル部分の建築は、8-9/14-15 世紀に遡ると見られている[537]。

(429) Maqbare Pīr Veshte (Pīr Nomīr)[538]

Ṭāleqān – Rūstāye Veshte

(北緯 36 度 09 分 20 秒、東経 50 度 48 分 56 秒、標高 2358 メートル)

(430) Seyyed ʻAlā al-Dīn va Sharaf al-Dīn (写真 1053,1054)

Ṭāleqān – Rūstāye Ourāzān

(北緯 36 度 07 分 52 秒、東経 50 度 52 分 35 秒、標高 2410 メートル)

Seyyed ʻAlā al-Dīn va Sharaf al-Dīn az navādegāne Emām Moḥammad Bāqer[539]

村のはずれ近くの川の畔。廟の向こう側は谷。周囲は墓地。

木のサンドゥーグが置かれたハラムは人がサンドゥーグの周囲を巡るのがやっとの広さだが、部屋の周囲には礼拝用の空間が作られており、シャヒードの墓などもその空間に見られる。

建築様式などから廟のオリジナル部分の建築はサファヴィー朝末期あるいはザンド朝初期に遡ると推測される[540]。

(431) Emāmzāde Hārūn (写真 1055)

Ṭāleqān – Rūstāye Tekiye Jūstān

(北緯 36 度 11 分 09 秒、東経 50 度 53 分 49 秒、標高 1991 メートル)

Emāmzāde Hārūn b. Emām Mūsā b. Jaʻfar

村はずれの川の畔。墓地の中。

ターレガーンで最も人々の信仰を集めている聖所の一つであるとのことで、各地からやってくる人々のためにザーエルサラーや図書館などの設備が用意されている。

廟は傷みが激しく、改修が行われている。塔の形をした廟に、近年になっ

---

537 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.375-378. *Pazhūhesh-nāme*, p.160.

538 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.371-374. *Pazhūhesh-nāme*, p.160. 筆者は未見。

539 廟内には特に詳細な血統を記したシャジャレ・ナーメはなかったが、*Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān* によると、テヘラン市の Emāmzāde Seyyed Nāser al-Dīn の息子だと見なされているとのこと。また、Ḥasan-jūn 村の Qāḍī Mīr Seyyed は、この二人のどちらかの子孫であるとされている。そしてカーシャーンのマシュハド・アルダハールのエマームザーデは二人の祖先にあたると信じられている。(p.201)

540 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.401-403. *Pazhūhesh-nāme*, p.161.

て礼拝用の部屋・ホセイニーエが付け足された。

ズィヤーラト・ナーメなどによると、エマームザーデ・ハールーンは160/776-7年にマディーナで生まれ、211/826-7年にここで亡くなり、埋葬された。

981/1573-4年の日付のある碑文が残されていることから、建築年代が少なくともサファヴィー朝時代に遡ることが明らかである[541]。

(432) Emāmzāde Seyyed Ḍiyā al-Dīn (写真 1056,1057)

Ṭāleqān – Rūstāye Khachīre

(北緯36度09分51秒、東経50度55分34秒、標高2125メートル)

Emāmzāde Seyyed Ḍiyā al-Dīn az navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far

村からは離れた川沿いを走る街道の下。川に向かって落ち込む急な坂に張り付くようにして作られた廟。

古い塔形の廟に礼拝用の空間を新しく取り付けてある。廟の古い木の窓枠が外され、ダヒールが結ばれている。現在の廟のすぐ下にホセイニーエ、管理事務所などが作られている。

地域の人々の信仰を最も集めている聖所の一つであり、人々が曜日を問わず集まってくる。

廟の建築年代は7-8/13-14世紀に遡ると推測されている[542]。

(433) Emāmzādegān Esma'īl va Esḥāq (写真 1058,1059)

Ṭāleqān – Rūstāye Gate-deh

ターレガーンのほぼ東端にある村の外れ。山の斜面の下。

現在は完全に壊れてしまっている。廟を直すようにという夢を見た村人がいて、再建をしたいと思っているが財政的な問題などがあり、ワクフ慈善庁に援助を求めているとのこと。

エマームザーデの名前は、実は村の人々は正確には知らない。この名前はワクフ慈善庁がつけたもので、村の人たちは単に「ズィヤーラトガー」と呼んでいる。

村の人々は今でも廟の跡の背後にある山の斜面にろうそくを灯したりして、祈りを捧げているとのこと。

建築年代は4-5/10-11世紀に遡ると見られている[543]。

---

[541] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.100-103. *Pazhūhesh-nāme* によると、5-6/11-12世紀のものである(p.154)。
[542] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.409-410. *Pazhūhesh-nāme*, p.161.
[543] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.74-75. *Pazhūhesh-nāme*, p.153.

(434) Ma'ṣūmzāde Pīr Gholām (写真 1061,1062,1063)

Ṭāleqān – Rūstāye Dehdar

(北緯 36 度 12 分 82 秒、東経 51 度 03 分 09 秒、標高 2505 メートル)

村の外を流れる川を遡っていくと、背の高い Shāl と呼ばれる巨木とトゥートが見え、少しひらけた場所に出る。そこにたてられた石造りの小部屋。屋根は落ちてしまっている。近年、村の人々が簡単な屋根をかけたが、大風で飛ばされてしまったとのこと。

入り口から見て右手の壁に Chahārdah Ma'ṣūm の名が刻まれた白い石がはめ込まれている。

廟の周囲にも碑文の刻まれた石が散らばっている。革命直後にこの一帯で大規模な盗掘が行われた。

村の人々がピクニックによく訪れるとのことであるが、ズィヤーラトのために訪れているのではないとのこと。どのような人物が葬られているのかも明らかではない。

この一帯で採取される陶片などから、廟を含む周辺地域の起源は 7-8/13-14 世紀頃に遡ると見られる[544]。

(435) Pīr Jamshīd (写真 1064)

Ṭāleqān – Rūstāye Mehrān

(北緯 36 度 12 分 36 秒、東経 50 度 56 分 14 秒、標高 2161 メートル)

村はずれの水路のほとり。廟の奥は広い墓地。

木製のサンドゥーグが置かれたハラムのみの小さな廟。

ティール月の 20 日にターレガーン各地から人が集まってくるとのこと[545]。

廟の建築年代は、建築の様式などから 9-10/15-16 世紀に遡ると考えられている[546]。

(436) Maqbare Sheikh Ḥosein (写真 1065,1066,1067)

Ṭāleqān – Rūstāye Dīzān

(北緯 36 度 13 分 39 秒、東経 50 度 57 分 42 秒、標高 2310 メートル)

村の中の小さな廟。小路を挟んで小さな墓地。

小路よりも高くなった場所に建っている。隣接して小路と同じ高さにホセイニーエが作られており、このホセイニーエから階段で廟に入るようになって

---

544 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.87-90.

545 筆者が訪れたときには詳しく理由を聞くことができなかったが、*Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān* によると、この村の人々は毎年ティール月の 20 日(西暦 7 月 11 日頃)が真のアーシューラーの日であると信じているため、この日に哀悼の儀式を行うとのことである。(p.112)

546 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.111-113. *Pazhūhesh-nāme*, p.154.

いる。

木のサンドゥーグには、ダヒールが結ばれたり様々なものが置かれたり、人が熱心に訪れている様子が見られる。しかし、その一方で、比較的広い村の一部では、廟の存在を知らない人も見られた。

建築様式などから、10-11/16-17 世紀の建築に遡ると考えられている[547]。

(437) Emāmzādegān Zeid va Ebrāhīm (写真 1068)

Ṭāleqān – Rūstāye Karkabūd

(北緯 36 度 12 分 56 秒、東経 50 度 51 分 11 秒、標高 2320 メートル)

Emāmzādegān Zeid va Ebrāhīm az navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far

村の中心を通り抜ける道路沿いの緩い斜面に建つ廟。

土に半分埋もれてしまっているために廟内が湿気で痛んでしまって大変なので、早く改修したいが、ワクフ慈善庁も文化財保護庁もなかなか援助をしてくれないとのことであった。

文書や建築様式から、9-10/15-16 世紀に建築されたものと見なされている[548]。

(438) Emāmzāde Shāh Moḥammad Ḥanīfe[549]

Ṭāleqān – Rūstāye Karkabūd

(439) Emāmzādegān Sa'd va Sa'īd[550] (写真 1069,1070,1071,1072)

Ṭāleqān – Rūstāye Navīz

Emāmzādegān Sa'd va Sa'īd natījeye Emām Reḍā

(北緯 36 度 11 分 45 秒、東経 50 度 51 分 48 秒、標高 2112 メートル)

村のほぼ中央部にあるホセイニーエの一角を簡単な柵で囲った墓石。シャンデリアが置かれ、そこにダヒールが結ばれ、タスビーフがたくさんかけられている。

普段はホセイニーエの入り口が閉まっているため、墓に一番近いホセイニーエの裏口でズィヤーラトを行う人が多い。そのため、裏口に募金箱が置かれ、窓枠にダヒールが結ばれ、扉の下にはろうそくの跡が見られる。

非常にシャファーがあるため、村の人々の信仰が篤いとのこと。

ずっと以前に村の人々が見た夢によりここにエマームザーデたちが埋葬されていることが分かり、それ以後、ここにズィヤーラトをするようになった。以前の建物は取り壊し、新しい大きな建物となっている。

---

[547] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.114-116. *Pazhūhesh-nāme*, p.154.
[548] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.144-145. *Pazhūhesh-nāme*, p.155.
[549] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, p.153. *Pazhūhesh-nāme*, p.155. 5-6/11-12 世紀の建築とされている。筆者は未見。
[550] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.131-132.

ホセイニーエの地下には水が湧いており、どのような旱魃の年にも水が涸れることがないとのこと。

(440) Emāmzāde Qāḍī Mīr Seyyed (写真 1073,1074)

Ṭāleqān – Rūstāye Ḥasan-jūn

(北緯 36 度 12 分 39 秒、東経 50 度 44 分 27 秒、標高 2175 メートル)

Emāmzāde Qāḍī Mīr Seyyed b. Qāḍī 'Alā al-Dīn b. 'Alī b. Moḥammad Taqī b. Neẓām Abdīn b. Seyyed Qāḍī b. Seyyed Moḥammad b. Seyyed Aḥmad b. Seyyed Ja'far b. Faḍl al-Ḥaqq b. 'Alā al-Dīn b. Seyyed Zein al- Dīn b. Seyyed Bahā al- Dīn b. Seyyed Shams al- Dīn b. Seyyed Ḥosein al- Dīn b. Seyyed Qāsem b. Seyyed Yūsef b. Seyyed 'Ezz al- Dīn b. Seyyed Nāṣer al- Dīn[551] b. Seyyed 'Abd al-Shā'er b. Moḥammad al-Faqīh b. Aḥmad b. Seyyed 'Alī b. Emām Moḥammad Bāqer

村から離れた山の中。周囲よりも小高くなった丘の上。この丘にだけ木の緑が見られる。

木のサンドゥーグの置かれた廟に礼拝のための部屋などが設けられている。

ガーズィーだった人物が隠遁後、ここに湧く泉の傍らに住んでいた。死後、庵のあった場所に葬られ、廟が作られた。それがこの場所であるとのこと。

廟の建築年代は 9-10/15-16 世紀に遡ると考えられている[552]。

(441) Emāmzāde Ḥasan (写真 1075,1076,1077)

Ṭāleqān – Rūstāye Haranj

(北緯 36 度 13 分 15 秒、東経 50 度 46 分 07 秒、標高 2130 メートル)

Emāmzāde Ḥasan b. Dhakariyā[553] b. Moḥammad b. Emām Zein al-'Ābedīn

村はずれの丘の上。丘の下には墓地が広がっている。

近隣の人々の信仰を非常に集めており、人口が少なくなる冬期を除けば常に人がズィヤーラトに訪れている。

廟のオリジナル部分は、周辺から採取された陶片などから 9-10/15-16 世紀に遡ると推測されている[554]。

---

[551] テヘランのバーザール近くに葬られているエマームザーデ・ナーセロッディーンのこと。シャジャレナーメではエマームザーデ・ナーセロッディーンからガーズィー・ミール・セイエドまで何世代もあるが、廟の管理人をはじめとする人々には、エマームザーデ・ナーセロッディーンの息子が、Ourāzān 村の'Alā al-Dīn であり、その息子がこの廟に葬られているガーズィー・ミール・セイエドであると信じられている。(*Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*,p.222)

[552] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.221-226. *Pazhūhesh-nāme*, p.157.

[553] 本来は Zakariyā と綴られる名前であるが、シャジャレ・ナーメ、ワクフ慈善庁の文書類における表記はこの文字が使われている。

[554] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.231-233. *Pazhūhesh-nāme*, p.157.

(442) Maqbare Rūstāye Haranj[555] (写真 1078,1079,1080,1081)

Ṭāleqān – Rūstāye Haranj

(北緯 36 度 12 分 53 秒、東経 50 度 46 分 05 秒、標高 2117 メートル)

村に入る手前を谷沿いに村へ向かう細い道沿い。周囲に墓地などは見あたらない。

小さな部屋のみの廟。

窓ガラス代わりの木格子に新旧のダヒールがびっしりと結ばれている。

埋葬者は明らかではなく、敷物をめくってみても墓石などは置かれていないが、地面から頭を出した岩が崇敬の対象となっている。

(443) Emāmzāde Dhakariyā[556] (写真 1082,1083)

Ṭāleqān – Rūstāye Mīrāsh

(北緯 36 度 11 分 19 秒、東経 50 度 44 分 03 秒、標高 1960 メートル)

Emāmzāde Zakariyā az navādegāne Emām Mūsā b. Ja'far

村の入り口付近。マスジェデ・ジャーメとひとつながりになった建物。廟の前には墓地が広がる。マスジェデ・ジャーメは革命後に作られたもの。建物、ザリー、扉、全て新しくなっており、オリジナルはほとんど残っていない。

金属製の新しいザリーが置かれたハラムは、人がザリーの周囲を巡るのができる程度の大きさしかない。

廟の建築年代は 6-7/12-13 世紀に遡ることができると見なされている[557]。

(444) Qadamgāhe Kheḍr (写真 1094,1085,1086)

Ṭāleqān – Rūstāye Ārmūt

村を流れる谷間の川を村の奥に向かって遡っていくと、チェナールの木が一本だけ立っているのが見える。周囲には他に背の高い木がないので目立つ。

ガダムガーと言われているが、足跡らしきものは木の周辺には見あたらず、村の人に聞いても、誰の足跡が木のどこにあるのかは分からない。

近年、木の周辺で盗掘が行われているために、外部の人間が谷に入り込むことに警戒するようになっている。

(445) Emāmzāde Mehrāb (写真 1087,1088)

Ṭāleqān – Rūstāye Keshrūd

(北緯 36 度 13 分 08 秒、東経 50 度 38 分 16 秒、標高 1864 メートル)

---

[555] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.228-230. *Pazhūhesh-nāme*, p.157.

[556] 本来は Zakariyā と綴るのが一般的であるが、ワクフ慈善庁の文書類などではこのように綴られている。

[557] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.249-251. *Pazhūhesh-nāme*, p.157.

Emāmzāde Ebrāhīm から 100 メートルほど離れた小路の中。一見、村の家と区別が付かない小さな廟。

階段三段分高くなった場所に作られた部屋にある墓と、その下の礼拝用の部屋にアラムが置かれ、それにダヒールとしてスカーフがたくさん結ばれている。

廟の建築年代は 10-11/16-17 世紀と考えられている[558]。

(446) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 1089,1090,1091,1092)

Ṭāleqān - Rūstāye Keshrūd

(北緯 36 度 12 分 07 秒、東経 50 度 38 分 17 秒、標高 1860 メートル)

Emāmzāde Ebrāhīm b. Emām Mūsā b. Ja'far

村の中心部、マスジェデ・ジャーメの隣。墓地の中。

塔形の廟の周囲に礼拝用の部屋が作り付けられている。木製のサンドゥーグの置かれたハラムは、サンドゥーグの周囲を回ることができるくらいの広さしかない。

天井から下げられたひもに、ダヒールや金属製の鈴などがびっしりと結びつけられている。

廟の建築年代は 7-8/13-14 世紀と見なされている[559]。

(447) Pīr Keshī (写真 1093,1094)

Ṭāleqān - Rūstāye Kesh

(北緯 36 度 12 分 58 秒、東経 50 度 37 分 58 秒、標高 1856 メートル)

Abū 'Abdollāh b. 'Amr b. 'Abd al-'Azīz b. Moḥammad Keshī

エマーム・マフディー(Emām Zamān)の友(yārān)の一人であり、マフディー降臨の日に彼も復活し共に人々を導くと言われている[560]。

村の中の民家と変わらない外観の廟。急な坂の上にあり、下には川が流れている。

廟の建築年代はサファヴィー朝まで遡ると考えられている[561]。

(448) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 1095,1096,1097)

Ṭāleqān – Rūstāye Tekiye Nāve

(北緯 36 度 11 分 29 秒、東経 50 度 36 分 25 秒、標高 1850 メートル)

Emāmzāde Ebrāhīm b. 'Abbās b. 'Alī

---

[558] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.284-285. *Pazhūhesh-nāme*, p.158.
[559] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.282-283. *Pazhūhesh-nāme*, p.158.
[560] cf. *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, p.278.
[561] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.278-280. *Pazhūhesh-nāme*, p.158.

村の奥の小高くなった場所。巡礼者が多いため、ホセイニーエ、図書館などズィヤーラトの人々のための施設を建て、便宜を図っている。巡礼者の多くは帰省や避暑を兼ねて、夏に多い。

増改築が繰り返されているが、オリジナルは 9/15 世紀のものと推測されている[562]。

金属製のザリーが置かれたハラムは、廟全体が拡大された現在も以前の形のままで、ザリーの周囲を人が巡ることができる程度の広さしかない。

(449) Derakhte Moqaddase Chehel Dokhtarān (写真 1098,1099,1100,1101,1102)

Ṭāleqān – Rūstāye Tekiye Nāve

村の入り口近くの丘に張り付くようにして広がる樹齢 800 年ほどと見られる糸杉。丘の上からは Emāmzāde Ebrāhīm を正面に見ることができる。

Emāmzāde Ebrāhīm に恋した娘の一人がここに住んでいたと伝えられている[563]。

丘の上には小さな墓地が作られており、いくつかの墓石が見られる。

枝や地表に出た根にダヒールが大量に結ばれている。

(450) Emāmzāde Ebrāhīm (写真 1103)

Ṭāleqān – Rūstāye Ūchān

(北緯 36 度 15 分 21 秒、東経 50 度 32 分 14 秒、標高 1567 メートル)

Emāmzāde Ebrāhīm b. Moḥsen b. Emām Mūsā b. Ja'far

村から外れたバーグの中。周囲には墓地。廟の下を川が流れている。

夏には 50 家族ほどが村に住むが、冬には管理人以外は全て町で暮らしているとのことで、廟を訪れる人も春から夏にかけてしかいないとのこと。しかし、村による管理が行われているため、廟内外の手入れは行き届いている。

廟の建築年代は、7-8/13-14 世紀に遡るとされている[564]。

(451) Emāmzāde Maḥmūd (写真 1104)

Ṭāleqān – Rūstāye Kalārūd

(北緯 36 度 15 分 20 秒、東経 50 度 30 分 21 秒、標高 1507 メートル)

Emāmzāde Maḥmūd b. Emām Mūsā b. Ja'far

---

[562] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.327-331. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.

[563] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, p.328 ここではイラン暦ファルヴァルディーン月 25 日(西暦 4 月 14 日頃)に、ここに住み、亡くなった娘が白い服を着て Emāmzāde Ebrāhīm へズィヤーラトに行くという。そのため、この日にエマームザーデ・エブラーヒームに、ズィヤーラトの人々が最も多く集まってくると説明されているが、Emāmzāde Ebrāhīm のハーダムによると、娘は望むときにいつでもやってくるとのことであった。

[564] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.300-303. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.

村はずれの川岸に建つ廟。周囲は墓地。

廟の傍らに非常に古いチェナールの木が立っていたが、学校を建てるために切り倒してしまったという。

古い木のサンドゥーグが置かれ、その傍らのアラムにダヒールが結ばれている。

廟の建築年代は 11-12/17-18 世紀のものと見られている[565]。

(452) Emāmzādegān Mūsā va Salīm (写真 1105,1106,1107)

Ṭāleqān – Rūstāye Esfārān

(北緯 36 度 16 分 54 秒、東経 50 度 30 分 09 秒、標高 1936 メートル)

Emāmzāde Mūsā b. Emām Moḥammad Taqī

Emāmzāde Salīm b. Emām Ja'far

山の急斜面に張り付いた村の入り口。墓地の傍ら。

入り口を入って正面の廟がエマームザーデ・ムーサー。右手がエマームザーデ・サリーム。二人の間には直接の関係はない。

エマームザーデ・ムーサーの方は天井から結ばれた大きな布がたくさん下がっており、エマームザーデ・サリームの方には金属製の飾りが下げられている。

廟を挟むようにして、樹齢 400 年と言われる二本のチェナールの巨木が立っている。このため、遠目にはチェナールしか見えない。

廟の建築年代は、8-9/14-15 世紀とされている[566]。

(453) Ziyāratgāh[567] (写真 1108,1109)

Ṭāleqān – Rūstāye Parge

(北緯 36 度 16 分 25 秒、東経 50 度 27 分 13 秒、標高 1995 メートル)

村から 500 メートルほど離れたところに立つ樹齢 300 年と言われるチェナール。すぐ近くに干ばつの時にも涸れないという泉が湧いている。

アーシューラーの日になると幹や枝の一部から血を流すと言われている。そのため、アーシューラーの期間には遠方からも多くの人が訪れるとのこと。

(454) Emāmzādegān Ḥamze va 'Abdollāh (写真 1110,1111,1112)

Ṭāleqān – Rūstāye Kajīrān

(北緯 36 度 15 分 12 秒、東経 50 度 28 分 33 秒、標高 1791 メートル)

---

565 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.322-323. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.
566 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.305-308. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.
567 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.311-312. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.

Emāmzādegān Ḥamze va ‘Abdollāh b. Emām Mūsā b. Ja‘far

エマームザーデ・パーイーンとも呼ばれる。村をバーグに沿って下っていった川沿いの急斜面の上。

外見は村の家と変わらないが、中には木のサンドゥーグが置かれている。

廟の前に泉があり、水が流れ出している。これはどんな干ばつの時でも涸れることがないという。泉の近くに樹齢 200 年以上と言われる糸杉の木が立っており、ここにダヒールが結ばれている。

廟の建築年代は建築様式などから、サファヴィー朝初期に遡ると推測されている[568]。

(455) Emāmzāde Hāshem (写真 1113)

Ṭāleqān – Rūstāye Kajīrān

(北緯 36 度 15 分 12 秒、東経 50 度 28 分 33 秒、標高 1945 メートル)

エマームザーデ・バーラー。村から山の斜面を登ったところ。村へ降りる街道の下。

10 年ほど前の大雪で完全に壊れてしまい、土台の一部が残っているのみ。

再建に向けての準備は始まっているが、工事のめどは立っていないとのこと。

建築年代は Emāmzādegān Ḥamze va ‘Abdollāh と同時代と見られている[569]。

(456) Emāmzāde Maḥmūd (写真 1114,1115)

Ṭāleqān – Rūstāye Ahvārak

(北緯 36 度 14 分 32 秒、東経 50 度 29 分 27 秒、標高 1964 メートル)

村から離れた墓地の中。廟の後ろは崖。廟の周囲は墓地。

以前、廟の近くに村があったが、15 年ほど前に山崩れが起こり、村全体が移動したために、廟と墓地の外に広がるバーグだけがこの場所に残ったとのことであった[570]。

エイヴァーン部分に石灰が用意され、廟の手入れをする用意があるようだが、壁や天井の一部がはげ落ちているなど、人が頻繁に訪れている様子は見られない。

廟の建築年代は、建築様式などからティームール朝時代末期と推測されている[571]。

---

568 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.316-318. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.
569 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.315-316. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.
570 これについては、*Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān* にも説明されている。(p.319)
571 *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.319-321. *Pazhūhesh-nāme*, p.159.

(457) Emāmzāde ‘Alī ma‘rūf be Sheikh Abrī (写真 1116,1117,1118)

Ṭāleqān – Rūstāye Avāng

(北緯 36 度 10 分 43 秒、東経 50 度 48 分 52 秒、標高 1916 メートル)

Emāmzāde ‘Alī b. Ṣāleḥ

ターレガーンからの街道沿いに建つ廟。村の入り口に当たる。周囲には村の墓地が広がる。

廟内には木のサンドゥーグが置かれており、ダヒールが結ばれている。天井から下がるシャンデリアにもダヒールがたくさん結ばれている。

エマームザーデが海で溺れかかったときに、エマーム・ムーサーに助けを求めた。すると雲が現れ、エマームザーデを乗せてターレガーンに運んだという[572]。

(458) Emāmzāde Sho‘eib (写真 1119,1120)

Ṭāleqān – Rūstāye Avāng

(北緯 36 度 10 分 41 秒、東経 50 度 48 分 24 秒、標高 1893 メートル)

Emāmzāde Sho‘eib b. Ṣāleḥ

街道から川に向かって降りたところ。廟の入り口は川の方に向かっている。周囲には古い墓地。

エマーム・マフディーの友の一人であると考えられている[573]。

(459) Qadamgāh

Ṭāleqān – Rūstāye Jazīnān (写真 1121,1122)

(北緯 36 度 12 分 21 秒、東経 50 度 46 分 57 秒、標高 2141 メートル)

村を取り囲むバーグの中。

小さな小屋の中の小部屋に木製のザリーが置かれ、その中に二つの石が見られる。村の人によると、その上で二人の若いセイエドがドアーを行っているところが目撃され、その場所が聖所と見なされるようになったとのこと[574]。

---

[572] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān* に、この物語を描写した詩が全文掲載されている。(p.160-161) *Pazhūhesh-nāme*, p.155.

[573] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān*, pp.164-165. *Pazhūhesh-nāme*, p.155.

[574] *Āthāre Tārīkhīye Ṭāleqān* には、廟の管理人の話として、この二人のセイエドがエマーム・マフディーの友(yārān)であり、Seyyed Moḥammad Bāqer と Seyyed Esma‘īl という名であるとしている。(p.189) *Pazhūhesh-nāme*, p.156.

4．テヘラン州の＜聖所＞をめぐって

テヘラン州各地の聖所を巡り、聖所に関していくつか気づいた点について簡単にではあるがまとめてみたい。あくまでメモ程度のまとめであり、筆者が気づかなかった事柄も多いことと思う。また、統計や文献資料・史料などを使った裏付けも必要であろう。それらは今後の研究課題として調査を続けていきたい。

(1)　＜聖所＞に埋葬されている人々

a．エマームザーデ

最初に、聖所にはバラキャトを持ち、敬意を払われるべき人物が埋葬されているとされていることが多いと述べた。イランのシーア派住民が多数を占める地域では、それがエマームザーデと呼ばれる、12 人のエマームの血を引く人物であることがほとんどである。どのエマームからの血統であるのかは、廟内のズィヤーラト・ナーメに書かれている場合もあれば不明の場合もある。また、いくつかの説があって確定されていない場合もある。

とりあえず、現段階で確認できたエマームザーデの血統については次の通りである。血統の伝承が二つ以上ある場合もそれぞれカウントした。また、一つの廟に葬られている兄弟姉妹に関しては一人としてカウントしている。

	子供	子孫
第二代目 Emām Ḥasan	1	19
第三代目 Emām Ḥosein	1	0
第四代目 Emām Zein al-‘Ābedīn	10	45
第五代目 Emām Moḥammad Bāqer	2	3
第六代目 Emām Ja‘far	3	5
第七代目 Emām Mūsā	66	59
第八代目 Emām ‘Alī al-Reḍā	0	7
第九代目 Emām Moḥammad Javād	3	3
第十代目 Emām ‘Alī al-Hādī	0	3
第十一代目 Emām Ḥasan ‘Askarī	1	0

このように、第七代目 Emām Mūsā の子供、あるいは子孫であるとされるエマームザーデが圧倒的に多い。それに次ぐのが第四代目 Emām Zein al-‘Ābedīn 子供、あるいは子孫とするエマームザーデである。その理由については明らかではないが、イランにゆか

りのあるエマームであることが関係しているように思われる。Emām Zein al-'Ābedīn は、Bībī Shahr Bānū 伝説を通してイランと関係を持ち、Emām Mūsā は息子 Emām 'Alī al-Reḍā がマシュハドに葬られている。他のエマームたちに比べて親しみがあるからか、Emām Mūsā の息子とされるエマームザーデでよく言われるのが、「マシュハドのエマーム・レザーの弟（妹）だよ」である。

b. エマームあるいはエマームザーデと血縁・婚姻関係を持つ人々

Emām 'Alī の関係者としては、その子孫と伝えられている Ahl b. 'Alī と、甥とされるダマーヴァンド区 Kūhān 村の Emāmzāde Zein al-'Ābedīn がいる。また、Emām 'Alī の息子 Abū al-Faḍl の息子とされる人物も二人いた。

エマームあるいはエマームザーデと関係ある女性たちも見られる。Emām Ḥosein の妻にして Emām Zein al-'Ābedīn の母である Bībī Shahr Bānū はその代表格であろう。また、いくつかのエマームザーデでは、エマームザーデの母、妻、姉妹、子供などの墓が廟の一角に置かれ、ズィヤーラトに訪れた人々、特に女性たちのズィヤーラトの対象となっている。例えば、ヴァラーミーン区の Emāmzāde Hādī、フィールーズクーフ区の Emāmzāde Ma'ṣūm, Soleimān va Bībī Khātūn などがそれで、エマームザーデ本人のハラムよりも長時間これらの女性たちの墓のある部屋に留まる女性たちも多い。

Seyyed の墓所と伝えられる聖所も 17 カ所存在する。この 17 カ所はエマームザーデという敬称を持たず、管理人や地域の人々に確認を取っても、「エマームザーデではなくてセイエド」と言われるものがほとんどであった[575]。セイエドとは預言者の血を引くとされる人々であり、イランにおいてはエマームザーデという敬称が指し示す人々と重なるが、人々の意識においては、セイエドとエマームザーデの間には何かしらの区別が存在するように思われる。

c. エマームあるいはエマームザーデと関係を持つ人々

エマームザーデらに仕えていた人々の墓を奉った聖所も見られる。ラヴァーサーナート区の Ziyāratgāhe Pīr Javvār は、シャフレ・レイに埋葬されている Shāh 'Abd al-'Azīm に仕えていた gholām(奴隷、使用人)であったと伝えられている。サーヴォジベラーグ区の Emāmzāde 'Abolhvāh va Ṣāleḥ の Ṣāleḥ は Emāmzāde 'Abolhvāh va Ṣāleḥ に仕えていた人物であるが、二人は同じ廟の同じ大きさの墓を持ち、訪れた人々は二人に等しくズィヤーラトを行う。

サーヴォジベラーグ区 Kesh 村の Pīr Keshī は Emām Mahdī の yārān (友)の一人と言われる。

575 テヘラン市内の Seyyed Valī は文書資料の上ではエマームザーデという敬称が使われないが、バーザールの人々の中には、エマームザーデとして認識している人も多かった。

d. Sheikh あるいは Pīr

Sheikh が８カ所、Pīr が９カ所。一部は上記 c と重なっている。

イスラーム法学者や宗教的に敬意を払われるべき人物の墓所となっているが、実在が確認できるシャフレ・レイ区の Sheikh Ṣadūq のような人物もいれば、キャラジ区 Āteshgāh の Pīr Pīrān のようにいわれの全く不明な人物もいる。

シェイフと呼ばれる人物も、ピールと呼ばれる人物も現在聖所として人々に敬意を払われている数よりもずっと多かったはずである。しかし、その中でどうしてこれらの人物たちだけがバラキャトを持つと認識され、聖所となるに至ったのかは不明である[576]。

e. 預言者

ロバーテ・キャリーム区 Peighambar[577]村には預言者 Lūṭ のものと言われる墓廟がある。どのようにしてここにたどり着き、亡くなったかなどについては分からない。

(2) ＜聖所＞の種類

聖所には、自然物やある特定の人物に由来するが墓所ではないものもある。聖所の一部には、墓石が置かれ、墓所としての体裁を整えてはあっても、古い信仰の様子を残しているように見えるものもある。

a. サッカーハーネ

本来は水汲み場として設置されたサッカーハーネが、その機能を失ってなお聖所として人々の信仰を集めていることがある。ラヴァーサーナート区 Afje 村の Saqqā-khāne Abū al-Faḍl と、ダマーヴァンド区 Vādān 村の Saqqā-khāne Abū al-Faḍl がそれである。テヘラン市内でも水が出る出ないにかかわらず、古いサッカーハーネが信仰対象になっているのを目にすることがある。

ダマーヴァンド区 Morā 村の Saqqā-khāne Bībī Bī-Ḥaram Khānom は、設置されて数年で既に周辺住民によって聖所と見なされ、ダヒールが結ばれたり鍵がかけられたりしている。

b. ガダムガー

エマームをはじめとする、宗教的に敬意を払われるべき人物の足跡があるとされる Qadamgāh は６カ所確認できた。

---

576 Sheikh Ṣadūq については、死後数百年経って発見された遺体が昨日亡くなったかのような状態だったという奇跡によるものだとも言われている

577 ペルシア語で「預言者」の意味。

Qadamgāhe Khāje Kheḍr	Rūstāye Varskhārān
Qadamgāhe Abū al-Faḍl	Rūstāye Sa'īd ābād
Qadamgāhe Āqā Seyyed 'Alā al-Dīn	Jādde Chālūs – Rūstāye Velāyat-Rūd
Qadamgāhe Solṭān Sabz Pūsh	Ṭāleqān – Rūstāye Galīnak
Qadamgāhe Kheḍr	Ṭāleqān – Rūstāye Ārmūt
Qadamgāh	Ṭāleqān – Rūstāye Jazīnān

Kheḍr あるいは Sabz Pūsh のガダムガーが三カ所、Abū al-Faḍl のガダムガーが一カ所、Āqā Seyyed 'Alā al-Dīn[578]のガダムガーが一カ所であった。サーヴォジベラーグ区 Jazīnān 村のものは、正確には足跡があるのではなく、そこで不思議な光景が目撃されたことによるものであり、なぜそこがズィヤーラトガーではなくてガダムガーと呼ばれるのかは分からない。

c. 聖樹

現在でも樹木そのものが崇拝対象となっているものは 15 カ所であった。木の種類としてはほとんどがチェナールの木であり、その他にサッケズ、veh、糸杉、トゥート、名称不明がそれぞれ一本ずつであった。そのどれもが樹齢数百年以上になると言われる巨木であり、周辺の人々の崇敬の対象となり、ダヒールが結ばれたり、根本でろうそくをともしたりするなどの行為が今でも行われている。

Emāmzāde Maḥmūd	Jādde Souleqān – Rūstāye Keshāre Pāīn
Panj tan	Rūstāye Vajh ābād
Qabrestāne Rūstāye Bāgh-gol	Rūstāye Bāgh-gol
Ziyāratgāhe Hādī va Mahdī	Rūstāye Chenār 'Arabhā
Derakhte Saqqeze Moqaddas	Rūstāye 'Eine-varzān
Ziyāratgāhe Chenār Jouzdār	Rūstāye Vādān
Pīr Golbū	Rūstāye Āb'alī
Shāh Chenār	Rūstāye Āb'alī
Chahār Chenār	Rūstāye Mehr ābād
Pīsh	Rūstāye Ārdīne
Emāmzāde Hūd	Rūstāye Moghānak
Pīr Pīrān	Āteshgāh
Qadamgāhe Kheḍr	Ṭāleqān – Rūstāye Ārmūt
Derakhte Moqaddase Chehel Dokhtarān	Ṭāleqān – Rūstāye Tekiye Nāve

578 どういった人物なのか確認はできなかった。

これら巨木とイスラームとのつながりは曖昧である。伝承によってエマームザーデやピールとのつながりを持たされている場合もあれば、全くそうした作為もなく、「この地域でここにしかない特殊な木」であるから崇拝する、あるいは他に抜きんでた巨木であるために敬意が払われているように見えるものもある。

イスラームあるいはシーア派とのつながりでは、エマーム・ホセインの殺されたアーシューラーの日に血を流すチェナールが挙げられる。イラン国内で最も有名な血を流すチェナールはガズヴィーン州にあるが、テヘラン州にもダマーヴァンド区 Chenār ‘Arabhā 村と、サーヴォジベラーグ区 Parge 村のチェナールがアーシューラーの日に血を流すと信じられている。

サーヴォジベラーグ区Tekiye Nāve村のDerakhte Moqaddase Chehel Dokhtarānは同村のEmāmzāde Ebrāhīm に恋した娘であるとされている。Chehel Dokhtarān＝40 人の娘と名付けられているが、娘は一人だとのことである。

現在聖樹として人々の崇拝を集めているものでなくとも、廟の傍らに巨木が立っていることは珍しくない。むしろごく普通の光景であると言っても良いほどである。リストを片手に聖所を探していると、「この先の大きなチェナールの下だよ」「行けば分かるよ。大きなチェナールがあるからね」といった言い方での説明を受けることが多い。巨樹があったからそこに寄りかかるようにして埋葬が行われたのか、エマームザーデをはじめとする廟が聖樹を信仰するための口実だったのか判断ができないため、聖樹としてカウントしなかった。

d. 泉・ガナート

水が湧き出るところが人々の信仰を集めることがある。泉そのものが信仰対象となっているものはなく、多くは廟の地下に泉があったり、廟の傍らにガナートの出口が作られていたりする。これらも聖樹の項で述べた通り、泉と廟の関係を明らかにできないためにカウントしなかった。

明らかに泉を信仰対象としているのは、キャン区Keshāre Pāīn村のEmāmzāde Maḥmūdのみである。

シャファーを持つ泉としては、フィールーズクーフ区 Marzdārān 村の Emāmzādegān Yaḥyā va ‘Abdollāh の地下に湧く泉が挙げられるが、その他にも、聖廟近くに湧き出る泉を「シャファーがあるから」とペットボトルなどに詰めて持ち帰る人は多い。

e. 岩窟

岩窟や巨岩に対する信仰は、直接見ることはできない。しかし、明らかに岩窟信仰の名残であろうと見なすことができる聖廟は7カ所である。

Emāmzāde Bībī Zobeide	Rūstāye Kājān (Khorram deh)
Emāmzāde Esma'īl	Rūstāye Mahābād
Emāmzāde Khoshnām	Rūstāye Lazūr
Emāmzāde Taqī	Kalāk Bālā
Seyyed Ebrāhīm	Jādde Chālūs – Rūstāye Kondor
Emāmzāde Ebrāhīm	Jādde Chālūs – Tekiye Sepahsālār
Khātūne Qiyāmat	Rūstāye Fashand

これらはどれもえぐれた岩肌に貼り付けるようにして廟が作られている。ザリーや墓石が置かれているのは Emāmzāde Bībī Zobeide、Emāmzāde Esma'īl、Emāmzāde Ebrāhīm 、Khātūne Qiyāmat の四ヶ所、あとの三カ所では岩にろうそくを貼り付けるようにしてともしたり、岩に触れたりしながら祈る。

(3) 一部の＜聖所＞への巡礼者の集中と権威化

テヘラン州内には大小様々な規模の＜聖所＞が存在するが、その一部は特に多くの人々の信心を集め、巡礼者がテヘラン州内だけではなく他州からも訪れる場所となっている。シャフレ・レイ区にある Shāh 'Abd al-'Azīm、キャン渓谷の中の Emāmzāde Dāvūd、ハラーズ街道途中、マーザンダラーン州との州境近くの峠にある Emāmzāde Hāshem、テヘラン市北部、タジュリーシュにある Emāmzāde Ṣāleḥ などがその代表と言えるだろう。これらの聖所には他州から「巡礼バス」によって巡礼に訪れる人々も多い[579]。

人々の信仰を集める聖所はバラキャトを多く持ち、ズィヤーラトすることでシャファーが得られると考えられており、「医者にも見放された病気が治った」といった奇跡的な話が多く伝えられている。そしてそうした奇跡譚がまた人々を聖所に引きつけるということを繰り返す。願い事を叶えてもらうため、願い事が叶ったお礼として寄付されるお金は年々増えており、それによって廟の改修や拡張を行い、周囲に巡礼者のための施設を作るなどの事業を実行することができるようになる。そしてそれがまた人々の評判を呼び、巡礼者を引きつけることになる。

上にあげたような聖所では、廟内に管理事務所が設けられ、廟や巡礼者の管理を行う専門の職員が雇われるようになる。寄付金を効率よく集めるために領収書を兼ねた様々な金額のチケットが用意され、敷地内に様々な宗教的な商品を扱う売店が用意され、巡

579 廟の管理人たちによると、イラン国内だけではなく、パキスタン、アフガニスタン、レバノン、シリア、バーレーンなどからも巡礼者が訪れ、寄付金が送られてくるとのことである。
また、特定の廟に特定の国からの寄付が集まる例も見られる。例えば、キャンにあるセイエド・アフマドはパキスタンからやって来たシェイフであったため、今でもパキスタンからの寄付が多く、街道から村への道路の舗装などはパキスタンからの寄付金によって行われたとの説明であった。

礼者が宿泊できる宿舎[580]が作られるなど、一種の巡礼ビジネスとも言える事業展開が見られるようになる。

このように聖所としての規模が大きくなるにつれて、管理事務所による巡礼者に対する管理が厳しくなってくる。

「ダヒールを結ぶこと」「南京錠をかけること」「ろうそくを灯すこと」「人々にナズリーをふるまうこと」「泊まり込んでシャファーを望むこと」「占いを行うこと」といった、それまで＜聖所＞で行われてきたことが次々と禁止されていき、信者は聖所を訪れ、ザリーに触れて我が身の苦しみを訴え、しばし廟内に留まることくらいしか許されなくなってしまう。ザリーに触れることも、人々が多く集まる聖所では人の流れをスムーズにするために、「早く離れろ」と管理人や警備員に注意され、あまつさえはたきで叩かれるようにして、すぐにそこを離れることを強制されることすらある。(写真 27、1079)

禁止行為が増えることと同じく、タジュリーシュの Emāmzāde Ṣāleḥ で、人々の信仰を集めていたチェナールの古木が廟の改修に際して切り倒されてしまい[581]、ろうそくを灯すための場所が境内(ṣahn)から外に出されてしまったように、イラン・イスラーム共和国という中央権力が信仰のすべてを管理しようとする中で、聖所の管理事務所やワクフ慈善庁、ゴムをはじめとする宗教的権威やひいては政府といった権威が認定しない信仰のあり方が排除される傾向が強まっている。

また、シャフレ・レイ区の Shāh ‘Abd al-‘Azīm では、最近、これまであった貸しチャードルを廃止し、「はじめから正しい服装でズィヤーラトに訪れる意志を持っていた女性」以外の入場を拒むようになった[582]。

聖所が権威化する傾向を信徒たちはどのように見ているのであろうか？

筆者が各地の聖所で見聞きする限りにおいては歓迎されているように見える。「権威ある」聖所に詣でることで、より権威のあるバラキャトを得ることができ、シャファーを得るであろうと見なしているようである。こうした信徒の考え方と政府をはじめとする宗教的権威の聖所への干渉は、現在の聖所のあり方に様々な影響を与えている。

(4) ＜聖所＞の大規模化とホセイニーエ[583]、マスジェドへの転換

---

580 こうした宿舎は部屋だけが用意されており、トイレやシャワーは共同。台所が用意されており自炊ができるようになっている。基本的に宿泊料は設定されておらず、宿泊した人が出したいだけの金額を出せば良いことになっているそうであるが、無料ということではないとのことである。

581 イランを旅行したプーラークの残した旅行記にもこのチェナールについては「他に類を見ないものである」と書かれている。(Pūlāk, pp.76-77)

チェナールを切り倒した跡には現在、人々からの寄付金などを受け付ける事務所が建てられ、その痕跡を残していない。

582 マシュハドのエマーム・レザー廟、ゴムのマアスーメ廟も同様である。また、シーラーズのシャー・チェラーグ廟では明らかに外国人である女性へのチャードルの貸し出しを拒むようになっている。

583 アーシュラーの時にロウゼ（アーシュラーの悲劇語り）を行ったりするための空間。アーシュラーの時以外にも宗教的な行事や葬儀などの際にも使われる、一種の地域の共同作業空間。

各地の聖所を巡っていると、改修中あるいは増築中の廟が目につく。聖廟建築ブームと言って良いほどである。

古くなり、壁や天井、ドームが痛んだから修理をする、といったレベルではなく、全く新しい建物として廟を建築するケースが目立つ。

新たに作られる廟はいくつかのパターンはあるが、エスファハーンのエマームのモスクに似せた青いタイルのドームか玉葱型の金色のドームを持つ、どれも似たり寄ったりな印象の建物となり、それ以前に持っていた地域性や独自性は失われる。そして以前より広くなった廟の中に置かれるザリーも、エスファハーン様式の金属のものに取り替えられることが多い[584]。天井からさがるシャンデリアが廟内を明るく照らし、男女のスペースは分けられる。

シェミラーナート区の Emāmzāde Panj tan も筆者が訪れたときは改修中であった。事務局の人に話を聞いたところ、「人々からの寄付は順調に集まっている。このエマームザーデが、タジュリーシュの Emāmzāde Ṣāleḥ のような廟とザリーを持つことに、人々は大変に満足をしているし嬉しく思っている」とのことであった。

また、パークダシュト区の Emāmzāde Ṭāleb も特徴的な楕円形のドームから、新しい廟によく見られるタマネギ型の金色のドームに変わっていた。管理事務所に尋ねたところ、「他がこういう形にしているのだから、自分たちも同じようにしてもいいじゃないか」とのことだった。

このように、「他と同じであること」「有名な聖廟と同じ形であること」が聖所のステイタスを高めると考えられているかのようである。

礼拝を行ったりロウゼハーニーなどの宗教行事を行うためのスペースを作ったりすることも、改修、あるいは増改築などに際して多く行われている。

これまであった廟にこうしたスペースが作り付けられたり廟を広げて空間を確保したりすることも多いが、廟全体を作り直してマスジェドやホセイニーエが主である空間となってしまうこともある。

例えば、ラヴァーサーナート区 Kalān 村にある Emāmzāde Ebrāhīm は、本来廟であった空間が新たに建設されたマスジェドの片隅に追いやられてしまい、マスジェドが主たる空間として取って代わってしまっている。ヴァラーミーン市の Shāh Ḥosein も現在はホセイニーエの片隅の小部屋である。

テヘランの大バーザールの中にある Seyyed Valī も、現在は併設されているマスジェドとしての機能の方が大きく、エマームザーデそのものは閉められていることも多い。

更には、聖所を完全に取り壊し、マスジェドにしてしまうケースも見られる。

キャラジ区の Arange 村にあった Emāmzāde Ebrāhīm と、テヘランのジョヌーベ・シャ

584 古いザリーあるいはサンドゥーグは破損が酷い場合は廃棄されるが、破損がほとんどない場合あるいは修理可能な程度である場合は、周辺でそれを必要としてる廟に寄付されることも多いとのことである。特に、ワクフとして寄付されたザリーは簡単に廃棄するわけにいかないとのことで、廟の一角にそのまま保存されていることもある。

ルギー区にあった Gheibī は聖所としての機能は全く失われ、マスジェドになってしまっている。マスジェドの管理人などに尋ねても、「このあたりにあったはず」というだけで、その場所への敬意は特に払われておらず、人々はそこを既に聖所と見なしていなかった。

聖所がホセイニーエやマスジェドとしての機能を大きくしている理由について、ワクフ慈善庁職員などが財政面での理由を挙げている。

ワクフ慈善庁をはじめとするイランの公的機関は、最初にも触れたように、基本的に聖所に対してはよほどのことがない限りは予算を割かない。しかし、マスジェドやホセイニーエの建設に対しては資金援助を行う。そのため、当該地域に他のマスジェドやホセイニーエがない場合など、それらを併設することで予算を得ることができる。また、国の方針として、マスジェドやホセイニーエの建設を推進していることもある。そのため、本来の廟を拡大し、これらの施設を付け加えることで予算獲得が容易になり、財政基盤の弱い農村部の聖所でも立派な廟を建設できるようになるという、双方にとってメリットがあるために聖所が様々な機能を持つようになっていると考えることもできる。

(5) 失われた＜聖所＞

宗教施設への転換以外にも何らかの原因で、聖所が聖所でなくなってしまうことがある。

シェミラーナート区の Emāmzāde Gheibī は公園となっていた。40 年ほど前までは小さな石造りの廟があり、傍らの大きなトゥート(桑)の木にダヒールを結び、ろうそくを灯していたとのことであるが、現在はそうした痕跡は全く見られない。

ヴァラーミーン区 Jalīl ābād 村にあったとされる聖所は現在、同村の保健所の敷地となっている。敷地内に聖所があった痕跡は全くなく、保健所職員は「そんなものはここにはなかった。ゴミ捨て場だった」と主張するが、村の人々は「以前はここにズィヤーラトガーがあった」と証言する。しかし、名前に関してはほとんどの人が「名前は分からないがエマームザーデがあった」と言っており、保健所近くの商店の持ち主が一人だけ「Morṭaḍā だった」と記憶しているのみであった。

ここでは、「ズィヤーラトガーがあった」という記憶は残っているが、既に聖所と見なしておらず、崇敬の対象とはなっていない。

また同じくヴァラーミーン区 Ṣāleḥ ābād にあったとされる Emāmzāde Gheibī は、現在工場となっている。工場の管理人が拒んだために敷地の中は確認できなかったが、周辺の住人によると廟の痕跡は全くなくなっているとのこと。そこにエマームザーデがあったことは記憶されているが、人々の意識の中でそこは既に聖所ではなくなっている。

サーヴァジボラーグ郡 Sorhe 村にあった Emāmzāde Esḥāq は、村はずれの道路脇にあったそうだが、今は塀の跡がわずかに見えるだけで廟はなくなっている。村の人も、「こ

こにエマームザーデがあった」とは言うが、現在は聖所として認識してはおらず、ただの空き地となっている。

ラヴァーサーナート区 Garm- ābdar 村にあった Ziyāratgāhe Pīr Javvār は現在、川の畔で水の湧く窪地だけが残っている。以前は廟があったとのことであるが、その痕跡もほとんど残っていない。村の若い人は名前も存在も記憶しておらず、老人たちも聖所であったことは認識しているがもう訪れることはなくなっているとのことであった。

ラヴァーサーナート区 Dashte Lār（ラール平原）にある Naqqār-khāne も、完全に廃墟となっている聖所である。ここは現在環境保護区内にあり、羊の放牧を行う人以外の許可書を持たない人の自由な往来は基本的に認められていない。すぐ近くに隊商宿があることから、以前はマーザンダラーンとテヘランを結ぶ街道の一つであったと思われるが、現在は訪れる人もなく、羊を飼う人たちによって羊小屋代わりに使われている。

ダマーヴァンド区 Āb'alī にある Pīr Golbū と、Ārdīne 村にある Pīsh、Moghānak 村にある Emāmzāde Hūd はどれも、村の外にあるバーグの中にある大きな木を崇敬の対象としている。どのケースでも村の人はその木が聖所であったことは知っているが、現在はどれも敬意はある程度払われているものの聖所としては機能していない。

ヴァラーミーン区の Haft Chūbe 村にあった Emāmzāde 'Alī (?)は、存在そのものが村の人によって忘れられつつある。

以前は村の中の一角に廟があったとのことであるが、イラン・イスラーム革命の数年後に盗掘によって廟が荒らされ、そのまま廟は崩れてしまったとのこと。その後、それを立て直す余裕もなくそのままになってしまっているが、村の人々は既にそこに廟があったことを忘れつつあった。

しかし、これについては、Haft Chūb と Sūre の二つの村の中間点に同名の Emāmzāde 'Alī という聖所があり、村の人がこの聖所と村にあった何らかの建物を混同している可能性がある。

パークダシュト区 Jītou にある Emāmzāde Dez 'Alī も痕跡もほとんど残っていない状態である。廟の前に生えていたという二本のクルミの木が残っており、それがかろうじて目印となっているが、廟がなくなってから 40 年近く経つとのことで、Jītou の人々はここに聖所があったことをほとんど記憶していない。

シャフレ・レイの Dehe Kheir にあった Emāmzāde Gheibī は、聖所のあった土地の持ち主が聖所ごと土地を農園（バーグ）として売ってしまったという。新しい持ち主はエマームザーデを取り壊し、完全にバーグとしてしまった。村の人々はワクフ慈善庁に訴えたが、エマームザーデのあった土地はワクフではなかったためにワクフ慈善庁としてもエマームザーデの保全措置を取ることができず、結局エマームザーデは取り壊されてしまった。

現在のバーグの持ち主は、エマームザーデのあった場所を筆者が見ることを固く拒み、扉を開けてくれることもしなかったが、隣のバーグの持ち主が廟のあった場所に隣接す

る場所を見せてくれた。それによると、このバーグの塀の一部が以前はエマームザーデの壁だったとのことで、今でも村の人々はここを訪れ、祈ったり、ろうそくを灯したりしているとのことであった。

上にあげた場所は、以前＜聖所＞であったが現在はその痕跡すらとどめずに消えてしまったものである。その土地の人ですらその存在を忘れてしまっている場合も多く、記録に従って村の人に尋ね回っても「そんなところはないよ」で済まされてしまい、昔のことをよく知っている年配の人を探し出し、道案内をしてもらってようやく見つけられるということがほとんどであった。

(6) 荒廃する＜聖所＞

上であげた聖所のように完全に失われてしまったわけではないが、人が訪れなくなってしまい、荒廃が進む聖所も見られる。

シャフレ・レイ区

Emāmzāde Sho'eib（Raḥīm ābād 村）

Emāmzādegān Aiyūb va Yūshe'（Kūshak 村）

ラヴァーサーナート区

Shāh Cherāgh（Garm- ābdar 村）

ダマーヴァンド区

Bībī Khadīje（Kūhān）

Emāmzāde Ṣāleḥ（Mobārak ābād）

Shāhzāde 'Alī Akbar（Havīr）

Boq'e Sheikh Sharīf Gīlārdī（Jīlārd）

フィールーズクーフ区

Emāmzādegān Shabī va Shebr（Fīrūz-kūh）

Emāmzādegān Ebrāhīm va Esma'īl（Fīrūz-kūh）

Emāmzāde 'Alī（Amīrīye - Shahrake Ṣan'at）

Mīr Shekār（Sarānzā）

Emāmzāde 'Alī（Dehgardān）

Emāmzāde Qāsem（Dehgardān）

Emāmzāde Bībī（Andvar）

Emāmzādegān 'Abdollāh va Shāhzāde Maryam（Siyāh-deh）

Emāmzādegān Aḥmad -Reḍā va Ḥasan -Reḍā（Kamand）

ヴァラーミーン区

Emāmzāde Bābā Aḥmad

パークダシュト区

Emāmzāde Chehel Dokhtarān（Jītou）

キャラジ区

Emāmzāde Razzāq（Se-rāhe Jārū）
Emāmzāde Ja'far（Arange）
Emāmzāde Soleimān（Arange）
Emāmzāde Ebrāhīm（Kalvān）

サーヴァジボラーグ区

Emāmzāde Zobeide Khātūn（Bormā Cheshme 村）
Emāmzāde Bībī Sakīne（Vardeh 村）
Chehel Dokhtar（Najm-ābād）
Emāmzādegān Esma'īl va Esḥāq（Gate-deh 村）

これらの聖所は廟そのものは、何らかの形で残ってはいるものの、人々が訪れている痕跡はほとんど見られない。また、そのほとんどが村や町から離れた場所にある。そのため、村の人に聞いても所在を知らない人もおり、人が訪れないために廟は屋根が落ちたり壁が崩れたりと崩壊に向かう一方に見える[585]。

(5)(6)であげた聖所にはいくつか共通点があるように思われる。以下に、考えられる原因を簡単にまとめてみた。これは、土地の人からの簡単な聞き取りによるものと、いくつかの状況からの推測なので、今後、もっと詳細に検討する必要があるだろう。

a. 近くに別の聖所が存在すること。

二つの聖所がごく近所にある場合に、一方がズィヤーラトの人々を集めているにもかかわらず、もう一方は訪れる人もなく荒廃してしまうということが見られるように思われる。また、道路の整備が進み、交通機関が利用しやすくなり、より遠方の大規模で有

585 フィールーズクーフ区 Siyāh-deh 村の Emāmzādegān 'Abdollāh va Shāhzāde Maryam は、廟の手入れは成されているが、管理人は廟のある村を離れて町に住み、廟内の墓石は盗まれ、訪れる人はほとんどいなくなっている。また、サーヴァジボラーグ区 Vardeh 村の Emāmzāde Bībī Sakīne も廟の修理はきれいに行われていたが、廟のある場所が個人所有のバーグの中であり、所有者に無断で立ち入ることができないことから、人が簡単には訪れることができない場所となっている。

名な聖所を訪れることが容易となった。それにより、「より大きく」「より権威のある」聖所へと人が流れているようにも見える。

ダマーヴァンド区 Kūhān 村の Bībī Khadīje はすぐ近くに、広い墓地を持つ Emāmzāde Zein al-'Ābedīn がある。人々は木曜日の午後になると Emāmzāde Zein al-'Ābedīn を訪れ、墓参りをするが[586]、すぐ目の前の Bībī Khadīje を訪れる人は誰もいない。

ダマーヴァンド区 Havīr 村の Shāhzāde 'Alī Akbar は村の外にあり、人が訪れている形跡はほとんど見られないが、村の中にある Shāhzāde Ḥosein の方は手入れも十分にされ、人々が多く訪れている様子が分かる。

フィールーズクーフの Emāmzādegān Shabī va Shebr も、フィールーズクーフで最も人々の信仰を集めているという Emāmzāde Esma'īl を見下ろす丘の上にある。しかし、Emāmzāde Esma'īl が巡礼宿（ザーエルサラー）まで備えた聖所であるのに対して、すぐ近くにあるこの聖所まで足を伸ばす人はおらず、廟は崩壊する一方である。

また、フィールーズクーフ近隣でも、Emāmzādegān Ebrāhīm va Esma'īl はフィールーズクーフの人々の墓地が隣接しているため、訪れる人もいるようだが、屋根が完全に落ちるなど、手入れがほとんどされていない様子が見て取れる。ただし、フィールーズクーフ市内には、他に Emāmzāde Khātūne Qiyāmat や、Emāmzādegān Sobḥān, Kan'ān va Borhān という二つの聖所があり、これらは大きな繁栄も見せていない代わりに特に衰退している様子も見られない。

同じくフィールーズクーフ近郊の Amīrīye には Emāmzāde 'Alī がある。近年建設された工業団地の入り口に当たる場所にあり、人の往来はあるはずであるが、これもほぼ完全に崩壊しており、人が全く訪れなくなっている。

キャラジ区 Arange 村には、Arange と接する村を含め、Emāmzāde Ja'far、Emāmzāde Ḥosein、Emāmzāde Ebrāhīm、Emāmzāde Soleimān の四つのエマームザーデが存在している。しかし、現在も人々の信仰を集め、管理が成されているエマームザーデは、Emāmzāde Ḥosein しかない。Emāmzāde Ebrāhīm は上で説明したとおりマスジェドとなっており、Emāmzāde Ja'far は訪れる人がいなくなり、廟は崩壊して手入れをする人もいない状態である。Emāmzāde Soleimān はまだ訪れる人もいる様子が見られるが、屋根は落ちかかり、扉も壊れ、荒廃の色は濃い。

パークダシュト区 Jītou の Emāmzāde Dez 'Alī は上で述べたとおり、40 年ほど前から人が通わなくなり、完全に廟は失われてしまった。Emāmzāde Dez 'Alī のすぐ近くには Emāmzāde Chehel Dokhtarān と呼ばれる聖所もあったが、これも Emāmzāde Dez 'Alī と同じ頃から人がほとんど通わなくなり、現在はかろうじて残っている廟もほとんど崩壊してしまっている。

---

586 イランでは木曜日の午後に死者の魂がこの世に帰ってくると考えられており、家族や友人の魂に会うために墓参りをする習慣がある。Emāmzāde Zein al-'Ābedīn もそうであるが、一部の聖廟は、普段は鍵がかけられて中に入ることができなくなっているものもある。そうした廟も木曜日の午後には鍵が開けられ、墓参に訪れた人が参詣も行うことができるようになっている。

この二つの聖所から見える距離に Emāmzāde Panj ‘Alī がある。これは Jītou からさほど離れておらず、通いやすい場所にある。寄付なども多いようで、廟の改修などが積極的に行われている。

b. 廟を維持するために必要な巡礼者の減少

人が訪れなくなっている聖所に見られる共通点のもう一つは、周辺人口の減少あるいは住人の入れ替わりである。国からの多額の援助があるマスジェドやホセイニーエと違い、エマームザーデをはじめとする聖所はズィヤーラトの人々の存在によって成り立っている。そこを訪れる人がいなくなれば存在すら忘れられてしまう。あるいは、ズィヤーラトの人々や住民からの寄付がなければ廟を維持していくことはできない。

テヘラン市の周辺地域、特にダマーヴァンドやキャラジ、ヴァラーミーンで見られるのが、もともと村に住んでいた人たちがテヘラン市に移り住んでしまうという現象である。そのまま村の人口が減ってしまう場合もあれば、その後に、村での農作業や建築に使う煉瓦焼きの作業に従事するために、アフガン人やクルド人が移り住んでくる場合もある。テヘラン周辺の農村の一部には、アフガン人の村になっていると言って良いほどにアフガン人人口の多い村もある。また、人口の減少した村はそれと同時に高齢化も目立つ。

こうした住人の移動の結果、聖所に通う人が減り、自然と聖所は忘れられていってしまうことが起こるということも考えられるであろう。

住人が入れ替わってしまった場合、聖所が村の中にある、あるいは村のすぐ近くにある時にはそのまま信仰が引き継がれることもあるが、新しい住人が聖所に関心を持たない人々である場合は、聖所は放棄されたままとなってしまう。

フィールーズクーフ区の Emāmzāde Bībī は、Andvar 村から少し離れた場所にある。現在、Andvar 村は住人がすべて離村し、廟の周辺にある畑に農作業に来る以前の住人が時たま見られるだけになっている。

この離村の結果、エマームザーデは訪れる人がほとんどなくなってしまい、Emāmzāde Bībī は完全に崩壊してしまった。残る廟にもびっしりと落書きがされており、ろうそくの跡もダヒールもなく、ゴミは散らかり放題と、遊びに来る人はいても、聖所として人々がこの場を大切にしている様子は全く見られない。

同じくフィールーズクーフ区 Siyāh-deh 村の Emāmzādegān ‘Abdollāh va Shāhzāde Maryam も、住人のほとんどがサーリーあるいはフィールーズクーフに移り住み、村に残っている人はほとんどいない。また、残っている人も冬には町に移動し、そこで過ごしているとのことである。その結果、廟を管理するハーダムすらも村を離れ、廟を外から見ることはできても廟内に入ることはできなくなってしまった。

廟そのものの手入れはそれなりにされており、村の人に話を聞いても、エマームザーデに対する信仰心そのものが薄れたわけでもない様子は見て取れるが、様々な事情から

エマームザーデに対する関心が弱まっていることは明らかであった。この事情についてはまた別な箇所でも述べるが、ハーダムの離村により、廟の内部に入り、祈ることができなくなったことも理由の一つである。

キャラジ区、ダマーヴァンド区、フィールーズクーフ区、サーヴァジボラーグ区など、アルボルズ山脈沿いの高地にある地方では、春から秋にかけての農繁期だけ人が戻ってくるという村も多い。こうした村では、村の中の聖所あるいは逆に、ピクニックやキャンプに訪れるような場所となりやすい村から非常に離れた場所にある聖所は維持されるが、村のすぐ外側にある聖所が荒廃する傾向にあるように見える。

上でも例に挙げたキャラジ区 Arange は、春から夏にかけての果樹農園作業期には、テヘランあるいはキャラジから多くの人が村に戻ってくるが、秋から冬にかけては人がほとんど残らなくなるということである。Emāmzāde Ja'far は村から河を隔てた向こう側になり、Emāmzāde Soleimān も民家は近くにあるが村はずれに当たる。

同じく上で例に挙げたダマーヴァンド区 Havīr 村も冬の人口は極端に減るとのことである。村の外れにある Shāhzāde Ḥosein はきちんと管理されているが、村から少し距離のある Shāhzāde 'Alī Akbar の方は荒廃が進み、人が訪れている様子が見られない。

ラヴァーサーナート区 Garm- ābdar 村も人口が減少し、更に冬はテヘランに移動する住民が多いという。この村にあった Ziyāratgāhe Pīr Javvār は完全に消滅し、小さな廟が作られていたという場所に湧く泉が残るだけであり、もう一つあった Shāh Cherāgh も人が訪れている形跡はあるものの、建物は完全に崩壊してしまっている。

また、フィールーズクーフ区 Nām-āvar 村にある Shāh Ṭāher も管理が行き届かず、廟の入り口上部の屋根が落ち、棺のある部屋に入ることが難しい状態になっている。村の人たちによると、廟への関心が減っていることと、人口が減ってしまっているためにお金を集めることができないとのことであった。

パークダシュト区の Jītou は、以前の住人がテヘランをはじめとする都市部に移住し、現在は、町の周辺の農地で働いたり、小金を貯めてそれまでイラン人が経営していた店を借りたり買い取ったりして商売を始めたりしたアフガン人が多く住む町となっている。そのため、古くから住む人を見つけることが困難なほどになっている。

新たな住人によって、それ以前の住人たちにとっての聖所が聖所として引き継がれることもあるが、忘れられてしまうこともある[587]。この Jītou の Emāmzāde Panj 'Alī は村からも近く、新住民であるアフガン人も多く参詣に訪れている。しかし、そこから少し離れた Emāmzāde Chehel Dokhtarān と Emāmzāde Dez 'Alī はアフガン人が住むようになった頃には既に聖所として敬意が払われなくなりつつあったが、それが加速し、現在ではその存在を記憶している人もほとんどいなくなってしまった。

シャフレ・レイ区 Kūshak 村はずれにある Emāmzādegān Aiyūb va Yūshe'は、廟が崩壊

587 ダマーヴァンド区 Ābe Sard にある Boq'e Seyyed Mīr Moṭahhar は、Ābe Sard の住民の大多数がアフガン人になった現在も、新住人たちの信仰を集めている。

し、壁の一部と緑の布がかけられた棺が残っているだけであった。人が訪れている形跡はあるが、廟の再建を行おうとしている様子は全く見られなかった。廟の周囲に広がっている墓地には、新しいスンニー派式の墓が目立っており、話を聞いてみたら付近に沢山ある建築用煉瓦を生産する工場で働いているクルド人のものであるとのことであった。クルドの人たちは多くがスンニー派の信徒であり、シーア派信徒に比べると聖所に対する関心が低い。一方、廟を守り、維持してきた、土地を持ち、煉瓦工場を作ったり工場に土地を売ったりして本来の住人たちは町に移住し、その後に労働者として移り住んできた人々は、墓地は利用するが廟には無関心という情況になり、廟は荒れる一方となってしまったと考えられる。

シャフリヤール区 Bakke 村にある Emāmzāde Yaḥyā も Emāmzādegān Aiyūb va Yūshe‘ と似た状況にあるように見える。

c. 盗掘

荒廃する聖所に見られる原因のもう一つは、盗掘あるいは発掘である。

聖所には宝物が埋められていると考える人々が、聖所の下や周囲を掘り返し、荒らしてしまうことが見られる。酷いときには遺体が埋まっているとされる場所まで掘り返し、その上に作られていた棺をも破壊してしまう。

荒らされた後の廟を修復することもあるようだが[588]、そのまま放置され、見捨てられてしまう聖所も多く見られた。

キャラジ区 Se-rāhe Jārū にある Emāmzāde Razzāq、サーヴァジボラーグ区 Sonqor ābād 村にある Emāmzāde Bībī Sakīne Khātūn、同 Najm-ābād にある Chehel Dokhtar、フィールーズクーフ区の Mīr Shekār、ダマーヴァンド区 Jīlārd にある Boq‘e Sheikh Sharīf Gīlārdī、同 Havīr 村の Shāhzāde ‘Alī Akbar などがその例である。

村の人などにインタビューをすると、盗掘をされてしまうエマームザーデはバラキャトがないということだから、といった内容の答えをする人に出会うことがある。盗掘され、破壊が起こることで聖所に対する信仰心が薄れてしまうという現象が起こると思われる。Emāmzāde Bībī Sakīne Khātūn は、墓地としては現在も使用されているが、盗掘の穴が沢山開いた廟内を訪れる人はほとんど見られない。

聖所には、廟あるいは聖樹などに傷を付けると不幸なことが起こったり、その人物が発狂したり死んだりと、聖所を荒らす者に対する報復の物語が伝えられていることがある[589]。これは聖所のバラキャトが聖所を守っているということであり、報復が成されない聖所にはバラキャトがなく、シャファーを得ることができないということになる。そ

---

588 例えば、ダマーヴァンド区 Shalambe にある Emāmzāde Moḥammad は、村の人々の話によると、イスラーム革命直後の混乱期に墓地が掘り返されるなど盗掘が行われたそうだが、現在は修復され、周辺地域の人々の信仰を広く集めている。

589 例えば、スィースターンにあるズィヤーラトガーヘ・ビービー・ドゥーストでは廟の近くを掘り返した人が発狂し、死んだと伝えられている。

のため、そうした聖所は信仰に値しないと人々が考えるようになり、その結果、聖所の荒廃がより一層進むと見ることができるのではないだろうか。

盗掘ではなく、ワクフ慈善庁や文化財保護庁の調査や修理によって、かえって聖所が荒れてしまうことがあるという歎きも各地で聞かれた。

例えば、フィールーズクーフの Siyāh-deh 村の Emāmzādegān ‘Abdollāh va Shāhzāde Maryam では、管理人や村の住人たちが、ワクフ慈善庁や文化財保護庁の許可書を持った人々が廟の周辺を掘り返し、その結果、廟の裏から湧いていた泉が涸れてしまい[590]、また、廟内にあった二つの墓石を持ち去ったまま廟に戻してくれないと不満を露わにしていた。

また、同じくフィールーズクーフ Dardeh 村の Chahārdah Ma‘ṣūm では、ワクフ慈善庁が廟の修理をしてくれたのは良いのだが、廟内にあった墓石を持ち出した挙げ句に、村の人たちが中に入れないように入り口を煉瓦で塞いでしまったと、村の人々が嘆いていた。

また同じくフィールーズクーフ Āsūr 村にある Emāmzāde Solṭān Ebrāhīm –Reḍā では、文化財保護庁が廟の周囲を調査のために掘り返したまま直してくれないという。

発掘（あるいは盗掘）をした人たちが持っていたという許可書を見ることができないため、こうした村人や聖所の管理人たちの認識が正しいのかどうかを筆者は確認できないが、少なくとも、そこに住む人々がそのように信じ、公的機関とそうした機関と協力をして調査を行う人々を信用できないと考えていることは明らかであった。そのため、調査のために聖所を訪ねる見知らぬ人に猜疑の目を向け、時には聖所の場所を教えないという事態も起こっているほどである。

盗掘に関しては、村の人たちへの聞き取りから、1979 年のイスラーム革命後、イラン・イラク戦争が始まり、イラン国内が混乱していた時期に最も多かったらしい。その時期に、「エマームザーデの地下には財宝が埋まっている」という噂がまことしやかに流れていたことを記憶している人もいた。

d. シャジャレ・ナーメの有無

荒廃した聖所特にエマームザーデ付近の町や村の住人たちの主張の一つが、「シャジャレ・ナーメ[591]のないエマームザーデは偽物だから」というものである。偽物の聖所に対する信仰心を持ち続ける理由はないというのである。

確かに、荒廃してしまった聖所の多くはどのエマームと関連があるのかもはっきり分からないエマームザーデがほとんどである。しかし、現在も人々の信仰を集めているエ

590 ダマーヴァンド区の Havīr 村、Shāhzāde ‘Alī Akbar も、廟内に生えていた聖樹が盗掘の影響かその他の影響か枯れてしまっていた。この木が枯れてしまっていることについて「困ったものだ」と言う村人も見られた。

591 エマームザーデがどのエマームに連なるのかを示す血統図。

マームザーデにも、シャジャレ・ナーメがないあるいははっきりとしないものは多い[592]。

その一方で、自分たちが信仰するエマームザーデの身元をはっきりさせたいと考える人は多く、ワクフ慈善庁やゴムの研究所にシャジャレを明らかにするよう依頼をしているという話もよく聞く。シェミラーナート区の Faraḥezād にある Emāmzāde Ṣāleḥ のヘイアトル・オマナーたちも、いくつかの説がある Emāmzāde Ṣāleḥ と、近所にある Emāmzāde Abū Ṭāleb の血統を明らかにすべく[593]、熱心に文献の調査していた。

こうした動きから、エマームザーデがエマームの系譜の中にしっかりと位置づけられることで、権威が増すように考えている人が増えていることが明らかであるように思われる。これは前でも触れたように、イスラーム政権が人々の信仰を管理する中で、それ以前は「そこにあるもの」として信仰していたものに関して、それだけでは飽きたらず、権威の中における明確な位置づけを人々自身が求めるようになっていることは確かである。

e. 自然要因

地震や洪水などによって聖所が破壊された場合も、そこが聖所として人々の信仰を失う原因となる場合がある。

フィールーズクーフ区 Emāmzāde Solṭān Ebrāhīm –Reḍā 村にある二つのエマームザーデ、Emāmzāde ʻAlī と Emāmzāde Qāsem は地震によって廟が崩れた後、訪れる人がほとんどいなくなり、今では廃墟同然となっている。

ラヴァーサーナート区 Garm- ābdar 村にあった Ziyāratgāhe Pīr Javvār も、村の人によると、恐らく洪水の時に壊れてしまったとのことであった。

その一方で、キャン渓谷にある Emāmzāde Dāvūd は、洪水によって廟が流されるという大きな被害を受けたにもかかわらず、Emāmzāde Dāvūd の墓石だけは洪水が避けて通ったという奇跡故に人々の信仰をより一層集めることとなった。その結果、Emāmzāde Dāvūd はテヘラン州でも最も人々がズィヤーラトに訪れるエマームザーデの一つとして知られるようになった。

もちろん、破壊された後も人々によって信仰され、再建される廟も多い。この差がどこから来るのかは、慎重に検討される必要があるだろう。

---

592 例えば、ダマーヴァンド区 Shalambe にある Emāmzāde Moḥammad やラヴァーサーナート区 Chahār Bāgh 村の Emāmzādegān Faḍl va Fāḍel などはシャジャレがはっきりしていないが、周辺住民の信仰を非常に集めている。

593 Emāmzāde Abū Ṭāleb は旧 Faraḥezād 村の外れ、Emāmzāde Dāvūd への登り口に当たる位置にある小さなエマームザーデである。Faraḥezād の墓地の奥にあり、ごく小さな廟を持つエマームザーデであり、ヘイアトル・オマナーは特におらず、ハーダメが廟の入り口の鍵を管理している。同じ旧 Faraḥezād 村の反対側の外れにある Emāmzāde Ṣāleḥ は Emāmzāde Abū Ṭāleb に比べて人々からの寄付も多く、それによって廟の拡張工事が行われ、同時に事務所が廟の敷地内に設けられ、ヘイアトル・オマナーの一人がほぼ常にその事務所にいるほどである。Emāmzāde Ṣāleḥ のヘイアトル・オマナーたちが Emāmzāde Abū Ṭāleb の管理に関わっているわけではないが、同じ地区にあるエマームザーデとして気にしているとのことであった。

f. 教育の普及

テヘラン州では、現在、就学年齢のほとんど 100 パーセントの子どもが小学校に通っている[594]。

小学校のカリキュラムには宗教に関連する授業もあり、「模範的な」ムスリムになるための教育が行われる。この中で、礼拝を行うことやドアーを詠むこと、12 人のエマームたちに払うべき崇敬は教えられるが、人々が持っていた身近な聖所に対する信仰は顧みられずにいる。

誰のものかも分からぬ聖所に敬意を払い、願い事をするなど迷信であると言う若い世代も見られる。エマームザーデで話を聞くと、「お母さんが信仰をしているから一緒に来ているけど、私はこんなの信じていない。迷信だ」と言う人もいる。また、イスラーム政権によるイスラームの強要にうんざりしている人々の一部には、「信仰を持つこと＝後進的」といった言い方で、イスラームの信仰そのものを否定しようとする人もいる。

このように、聖所が荒廃する理由として考えられるものをいくつか挙げてみたが、荒廃の原因は決して一つではなく、これらの原因が組み合わさり起こるものであろう。そして筆者が気付かずにここであげなかった原因も存在するはずである。またその一方で、そうした荒廃の原因となりうる要素があってなお人々の信仰を集め続ける聖所も数多く存在する。この違いがどのようにして生まれるのかは判然としない。

(7) 生まれてくる＜聖所＞

消えていく聖所がある一方で、生まれてくる聖所もある。

そのほとんどが「夢」をきっかけとして生まれてくるものである。

イスラーム革命後にも、地域の人々によって「聖所」として認識されるようになった場所がテヘラン州にも存在する。

キャラジ区 Kondor 村にある Emāmzāde Ebrāhīm は村の人が見た夢がきっかけとなって発見された。その後、村の人々の熱意により寄付を募り、廟の建築が行われている。

ダマーヴァンド区 Karītūn 村の Emāmzāde Ebrāhīm も村人が見た夢がきっかけとなって発見されたエマームザーデであった。ワクフ慈善庁からも正式にエマームザーデとして認められ、人々からの寄付を募り、新しく廟を建築した。

(8) シャジャレ・ナーメと地域社会

上でも述べているとおり、エマームザーデと呼ばれる人々の血統は明らかでないこと

---

594 イランでは6歳から始まる小学校の5年間が義務教育である。